

府内城三ノ丸遺跡Ⅲ

—大分県庁新館受変電棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2016

大分県教育庁埋蔵文化財センター

府内城三ノ丸遺跡Ⅲ

—大分県庁新館受変電棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—



1 肥前磁器色絵花掛入（18世紀後半～19世紀）〈原寸〉
実測図は第8図（B区包含層出土）

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県土木建築部施設整備課の依頼を受けて実施した受変電棟新築工事に伴う府内城・城下町の発掘調査報告です。

遺跡の所在する大分市は古代から現在に至るまで豊後国、府内藩及び大分県の政治、経済、文化の中心地としての役割を果たしてきました。府内城は慶長二年（1597）に入封した福原直高の築城に始まり、万治元年（1658）の松平忠昭の入封により軍事・政治の拠点として明治時代までその機能を保ちます。府内城は本丸、西ノ丸の本丸域と武家屋敷群が配置された三ノ丸で構成されています。

本書で報告する府内城三ノ丸遺跡は万治元年（1658）の大給松平氏入部に当たり、木村又三郎が屋敷を構えた場所です。木村家屋敷については、平成3年度に調査を実施していますが、今回の調査は屋敷の西端部付近に該当します。調査では江戸時代の陶磁器・土器類、瓦類が多く出土しました。当時の府内城・城下町の武家屋敷で営まれていた生活を考えるうえで貴重な資料となりました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成28年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所長 後 藤 一 重

例 言

- 1 本報告書は、大分県土木建築部施設整備課の依頼を受けて大分県教育委員会が平成26年度に実施した、新館受変電棟新築工事に伴う府内・城下町の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、(株)九州文化財総合研究所に業務の一部を委託して実施した。
- 3 出土遺物の整理作業、実測・トレース・写真撮影は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（以下、センターという。）で実施した。なお、整理作業の一部を(株)九州文化財総合研究所に委託した。
- 4 検出した遺構、出土遺物などの所見については、吉田寛氏（センター主幹）に全面的な協力を得た。
また、池邊千太郎氏（大分市教育委員会）、仲光克顕氏（東京都中央区教育委員会）から有意義な御助言・御協力を頂いた。
- 5 出土遺物及び関係資料は、センターで保管している。
- 6 本書で使用した地形図（1／25,000）は国土地理院作成のものを利用した。
- 7 本書の執筆・編集は、センター受託事業班小林昭彦が担当した。
- 8 自然化学分析は、株式会社パレオ・ラボ（第4章第1節）、株式会社古環境研究所（第4章第2節）に委託した。

なお、本書の書名『府内城三ノ丸遺跡Ⅲ』は、県教育委員会がこれまでに刊行した『府内城三ノ丸遺跡』（1993年）、『府内城三ノ丸遺跡Ⅱ』（1994年）に続く連番とした。当該調査地点の周知の埋蔵文化財包蔵地の名称は「府内城・城下町」である。府内城・城下町の発掘調査については、大分市教育委員会が次数整理を行っている（『府内城・城下町跡5』大分市教育委員会2008年）。これに沿った場合、平成28年3月1日現在で大分県教育委員会、大分市教育委員会が発掘調査を実施した「府内城・城下町」の調査次数は25次となり、今回の調査は最新の第25次に該当する。

目 次

序 文

例 言

第1章 調査の経過と概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘作業の経過	1
第3節 整理等作業の経過	1
第4節 調査組織の構成	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の成果	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	14
第4章 自然化学分析	37
第1節 分析1	37
第2節 分析2	39
第5章 総括	40

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	府内城・城下町位置図	3
第2図	調査区位置図	5
第3図	豊後国府内藩御家中名前付	6
第4図	遺構配置図	8
第5図	調査区土層断面図	11
第6図	遺構実測図(1)	12
第7図	遺構実測図(2)	13
第8図	出土遺物実測図(1)	19
第9図	出土遺物実測図(2)	20
第10図	出土遺物実測図(3)	21
第11図	出土遺物実測図(4)	22
第12図	出土遺物実測図(5)	23
第13図	出土遺物実測図(6)	24
第14図	出土遺物実測図(7)	25
第15図	出土遺物実測図(8)	26
第16図	出土遺物実測図(9)	27
第17図	陶磁器・土器類編年図	29
第18図	軒平瓦編年図	30

表 目 次

出土遺物観察表	31
Tab.1 出土動物遺体	37

写真図版目次

写真図版一	遺跡全景(東上方面から)	43
写真図版二	遺構検出状況 土層1	44
写真図版三	土層1～土層3, SK1～SK4, SK8	45
写真図版四	SK5, SK6①	46
写真図版五	SK6②, ③	47
写真図版六	SK6④, SK6完掘状態	48
写真図版七	SK13, SK14, SK16, SK19, SK24, 遺跡完掘状態	49
写真図版八	出土遺物2～16	50
写真図版九	出土遺物17～32	51
写真図版十	出土遺物33～51	52
写真図版十一	出土遺物52～69	53
写真図版十二	出土遺物70～79, 81～93	54
写真図版十三	出土遺物94～96, 98～112	55
写真図版十四	出土遺物113～136	56
写真図版十五	出土遺物137～152	57
写真図版十六	出土遺物153～165	58
P L.1 府内城三ノ丸遺跡から出土した動物遺体(試料1・3)	38	
P L.2 府内城三ノ丸遺跡から出土した動物遺体(試料2)	39	

第1章 調査の経過と概要

第1節 調査に至る経緯

県庁新館受変電棟新築工事に伴う府内城・城下町の発掘調査は平成27年1月28日～2月24日に実施した。これに先行して樹木の移植に伴う調査を1月14日～1月26日に3日間実施し、遺構の存否確認を行った。当該地区は江戸時代の府内城三ノ丸に当たる。調査地点は当時の絵図などから府内藩の家老などを務めた木村家の屋敷が存在し、その南に隣接して木戸氏の屋敷が位置していたことが知られている。従前の調査を示すと、平成3年4月～5月に現在の新庁舎建設に伴って第1次調査、同年6月に第1次調査の南側に当たる本庁舎の付帯施設建設に伴う第2次調査を実施した。共に木村氏屋敷範囲内に該当し、江戸時代の建物痕跡や多量の陶磁器類が出土した。平成5年7月～8月には県庁舎前広場の記念碑建設に伴い木戸氏屋敷を調査を実施した。今回の調査は木村氏屋敷西端部付近が対象となったものである。

第2節 発掘作業の経過

発掘作業は、埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）が調査主体となって実施した。遺構埋土の掘下げ、実測作業、写真撮影など支援業務については、民間調査機関へ一括して委託する体制をとった。委託内容は、①重機による表土除去、②人力による遺構検出、③人力による遺構埋土掘下げ、④遺構実測、⑤遺構写真撮影、⑥現場管理などであった。センターの職員（調査員）は調査区の設定、遺構輪郭の確認、遺構埋土の確認、遺構の構造や遺物出土状態を把握し、受注業者の調査技師に各工程ごとに技術的指導を行い調査精度の確保と調査行程の管理に努めた。

（調査行程の概要）

平成27年1月14日(水)	植栽の移植に伴う遺構存否の確認
1月28日(水)	重機により区域北部から表土除去開始
2月3日(火)	重機により区域北部から表土除去終了
2月4日(水)	作業員による遺構の掘下げ開始
2月6日(金)	遺構実測・写真撮影開始
2月23日(月)	遺構掘削作業終了
2月24日(火)	調査区測量・写真撮影を行い、調査終了

第3節 整理等作業の経過

整理作業は、基礎作業と資料作成を一括して委託し、作業場を埋蔵文化財センターとして実施した。委託内容は、①遺物水洗、②遺物註記、③遺物接合、④遺物復元の4工程（前半工程）、⑤遺物実測、⑥遺物拓本、⑦遺物観察表基礎データ作成、⑧遺物実測図トレースの4工程（後半工程）及び遺物取出、遺物区分・整理遺物収納、整理作業施設の清掃等（諸作業）の各作業であった。埋蔵文化財センター職員は、遺物図版・遺構図版の作成、遺物写真撮影、遺構及び遺物写真図版の作成、原稿執筆、編集作業を行った。

整理作業は対象箱数24箱を対象として実施し、平成27年5月11日から平成27年8月31日に遺物水洗から遺物実測図トレースの各作業を行った。

報告書作成は図版作成、原稿執筆を9月1日から開始し、平成28年1月4日に終了した。

入稿は12月25日に行い、初稿を平成28年1月26日に受領した。

3月15日に校了

3月29日に報告書納品。

第4節 調査組織の構成

平成26年度

埋蔵文化財センター	所長	松村洋一
	次長（県事業班参事総括）	後藤一重
	管理予算班主幹（総括）	藤田幸三
	管理予算班副主幹	椎原由美
	県事業班専門員	小林昭彦

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大分県は周防灘を望む九州東岸中央部に面している。県南部はリアス式海岸が発達し、その内陸部は中央構造線沿いの山地・盆地地形を呈している。大分市は海岸に面した平野部が広がり西部を大分川、中央部を大野川が蛇行を展開しながら別府湾へと北流する。

大分平野周辺の地形は、西部に高崎山、南部を大野山地の北端を構成する霊山山地、東部を佐賀関山地など400m～800m級の山地が形成され、その縁辺に丘陵や台地が平野部を圍繞する景観をなしている。大分平野の低地は大分川・大野川による三角州が主体をなす。大分市の市街地は大分川河口部に広がっているといえる。府内城・城下町は市街地の中心部に位置する。



第1図 府内城・城下町位置図

第2節 歴史的環境

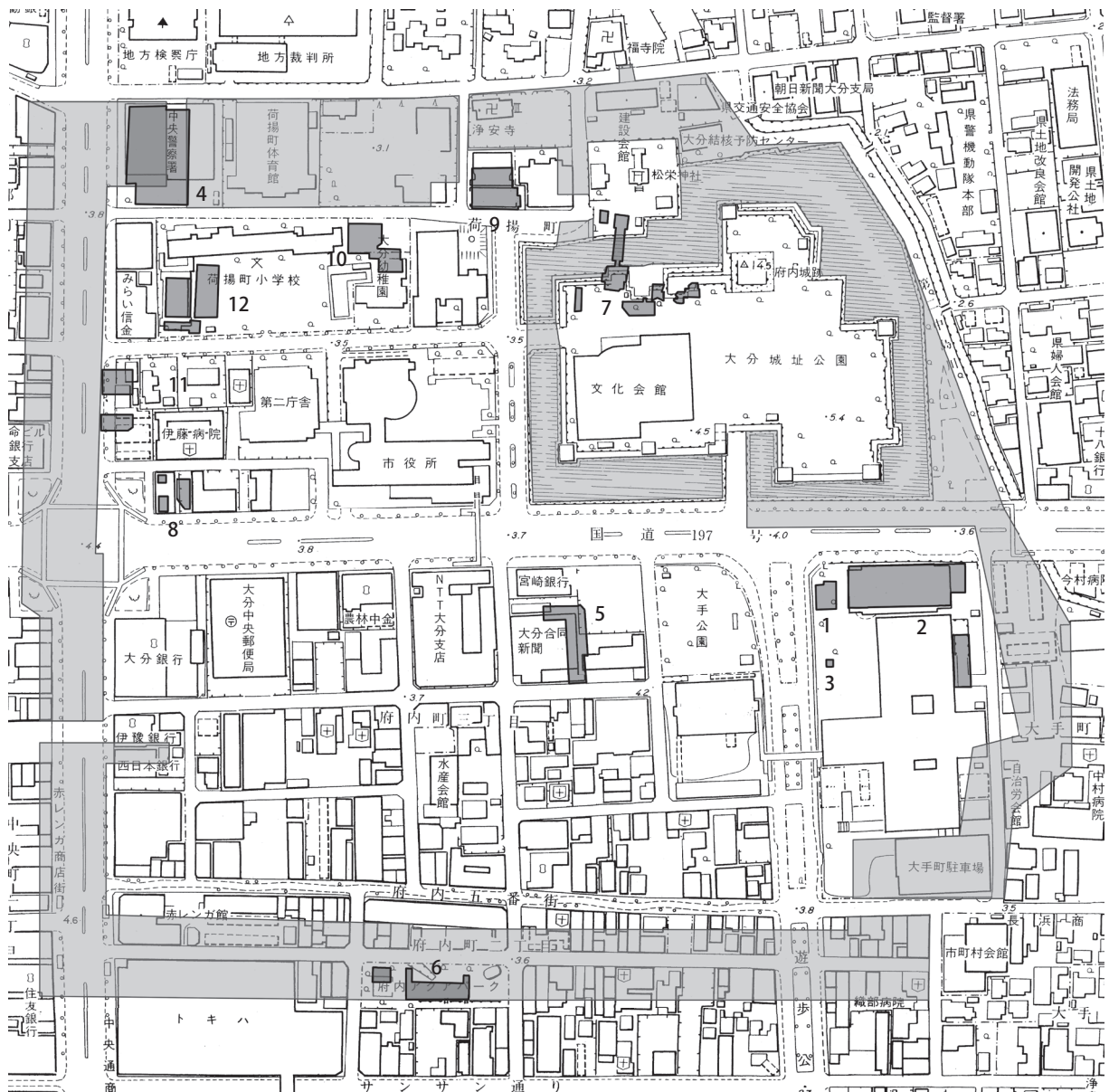
江戸時代の大分県は幕末段階で、中津藩（奥平氏10万石）・日出藩（木下氏2.5万石）・杵築藩（能見松平氏3.2万石）・府内藩（大給松平氏2.22万石）・白杵藩（稲葉氏5万石）・佐伯藩（毛利氏2万石）・岡藩（中川氏7万石）・森藩（久留島氏1.25万石）の八藩が小規模な領国を支配しており、「小藩分立」の状況であった。この中でも府内藩は小藩であったといえる。

府内城と城下町の形成は、慶長二年（1597）豊臣秀吉の命を受け白杵藩から入封した福原直高の築城に始まる。直高は別府湾に面する「荷落」の場所を築城地として、慶長四年（1599）には二ノ丸東三重櫓・三ノ丸家臣屋敷を完成した。地名「荷揚」に改め、城を荷揚城と称した。福原直高は白杵時代の6万石に大分・速見・楠3郡の6万石の加増を合せて12万石の府内城主となったため、石高にふさわしい城の規模となったとされている。その後、竹中重利が関ヶ原の戦いの翌年、慶長六年（1601）に入封し城郭の主要施設と城下町の建設に

着手した。慶長七年（1601）、天守閣・桜櫓・門・三ノ丸堀・山里丸、三ノ丸に入る東西北の入り口などが完成し、町屋48を配置したとされる。慶長十年（1605）城下町全体を囲む外堀が南北八町十九間（約946m）、東西十町三十五間（約1210m）の規模で掘削された。城名を「府内城」、城下町を「府内」とされ、この城下町は方形を基本とした縄張りで侍屋敷と町屋が分離され、堀で囲まれた城郭都市の様相を呈することとなった。竹中氏滅亡後、日根野氏が入封するが、一代で断絶した。幕府直轄を経て、松平忠昭が万治元年（1658）の入封以降安定するが、18世紀代になると大火や地震でたびたび被災した。その中で寛保三年（1743）の大火では城郭施設と城下町の大半を消失する壊滅的な被害を被った。このような災害から復興し明治まで大給松平氏の治世は続いた。

府内城に関する発掘調査は12箇所で行われており、このうち11箇所は三ノ丸の範囲内にあたる。これらの調査は、1～4を県教育委員会、5～12を大分市教育委員会が実施した。1・2・3は三ノ丸の南範囲に当たる。1は今回調査の調査地点であるが、2の武家屋敷地内西部に位置する。3は1・2の南に接する武家屋敷である。4は平成6年度に大分中央警察署別館庁舎新築工事に伴い発掘調査を実施した。調査の結果、三ノ丸北口の二重櫓台や石垣、さらに三ノ丸と町屋をつなぐ北口の通路や石垣の施設を確認した。北口跡の諸施設の構造が絵図や文献と検出した遺構と整合することから、福原氏～日根野氏段階の初期に実戦の出撃に有利な外柵形虎口から二重櫓台の構築によって防衛重視の内柵形虎口的な空間を創出し、大給松平氏段階では城主の権力を象徴する荘厳化した城門へと改修された変遷が明らかになった。5は平成5年度に大分合同新聞社屋建設工事に伴い発掘調査が実施された。溝状遺構・井戸・土坑などの遺構が確認され、陶磁器類などが出土した。17世紀後半～19世紀を中心とする時期の所産と考えられているが、遺構の配置から17世紀初頭頃の町割りを予測しうる可能性が指摘されている。1～3の西側に位置しており、武家屋敷の一角とされる。6は平成5年度に公園整備工事に伴い発掘調査が実施された。三ノ丸を囲む中堀は最大幅21間（約42m）をもつ。そのほぼ中央部が調査地点となった。堀内の堆積層から陶磁器類に加え漆器類、曲物、下駄などの木製品が出土し当時の生活の一端を知る資料となった。7は平成7年度に大分市の府内城再発見事業の一環として、廊下橋の復元、周辺整備に伴い発掘調査が実施された。調査は北ノ丸や廊下橋の接合部などの西ノ丸、本丸の一部が対象となった。府内城内の発掘初例として注目された。調査の結果、近代の建物基礎で城内の地形は大きく改変されていることが、あらためて確認された。一方で西ノ丸と山里丸を結ぶ廊下橋の基部や冠木門の礎石、西ノ丸と本丸を結ぶ土橋が確認された。また、北二重櫓の石垣は絵図では確認できなかった基底部の所見が得られた。8は平成10年度に民間開発に伴い発掘調査が実施された。三ノ丸西部に位置する。府内城築城時の整地層を挟む遺構が検出され、下層から戦国期の溝が確認された。南側の浄安寺との境界の石列が検出された。また、幕末に森下家の屋敷地であったことを証する「森下」の焼継文字をもつ磁器が出土した。9は平成17年度に大分市保健所建設整備事業に伴い発掘調査が実施された。「府内絵図」に示された北ノ丸西側の石垣・堀が検出された。また、17世紀初頭に遡る石垣も検出され、府内城の初期からの変遷が窺われた。10は平成18年度に保健所立体駐車場建設に伴い発掘調査が実施された。三ノ丸北部の当時海岸線に近い位置にあたる。江戸時代後半を中心とした整地面2面があり、18世紀後半代の火災処理土坑等が検出された。11は平成19年度に民間開発に伴い発掘調査が実施された。遺構面が2面確認され、上面の第1面では17世紀～19世紀代の遺構、第2面から近世の掘立柱建物が検出された。12は平成23年度に大分市立荷揚町小学校屋内運動場改築工事に伴い発掘調査が実施された。19世紀代の遺構から「手嶋」「上原」の焼継文字をもつ磁器が出土しており、絵図で示された武家屋敷の居住者と一致することや火災に伴う建物の建て替えの様相、さらに穴蔵に関する多くの所見が得られている。

今回の調査は平成3年度に実施した木村家屋敷の西端部付近の範囲を対象としたものである。

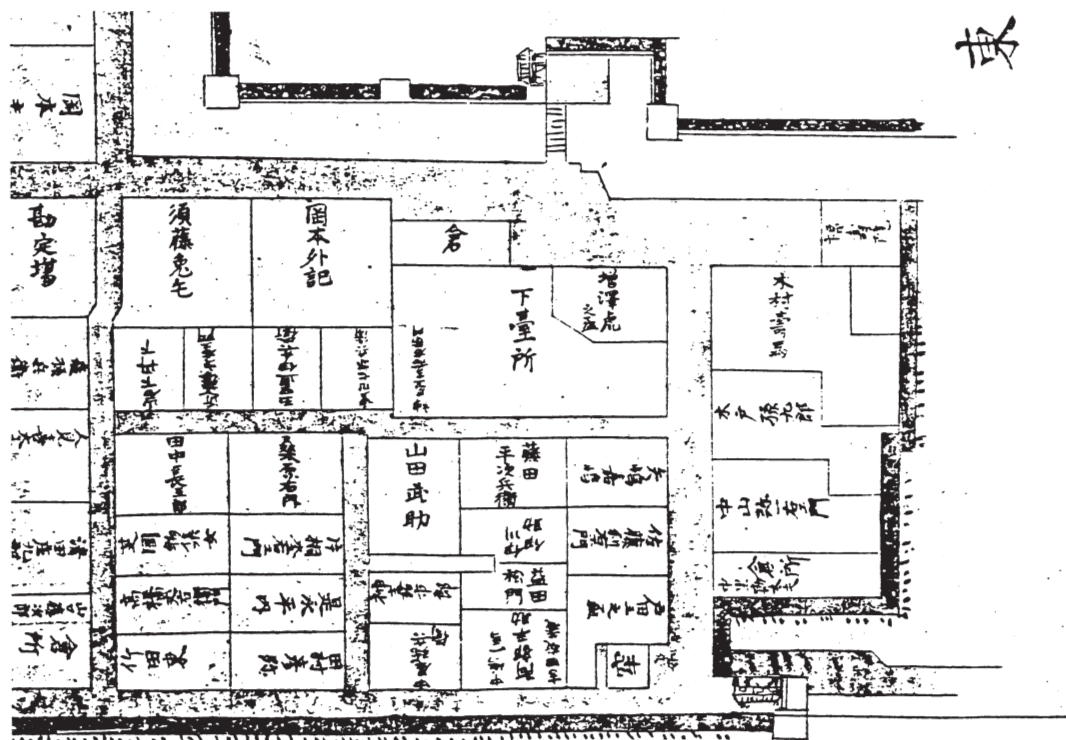


(1/4000)

番号	調査の内容	遺跡の概要	調査主体者
1	大分県庁新館受変電棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷 (木村家)	県教育委員会
2	大分県共同庁舎 (仮称) 建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷 (木村家)	
3	大分県共同庁舎前広場モニュメント建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷 (木戸家)	
4	大分中央警察署本部別館庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査	堀・石垣・櫓、三ノ丸北口	大分市教育委員会
5	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	
6	公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査	中堀	
7	公園整備に伴う埋蔵文化財発掘調査	西ノ丸、廊下橋、周辺建物	
8	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷 (森下家)、浄安寺	
9	大分市保健所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	北ノ丸、堀	
10	市営荷揚町中央駐車場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷	
11	民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷、道路	
12	大分市立荷揚町小学校屋内運動場改築に伴う埋蔵文化財発掘調査	三ノ丸武家屋敷、道路	

三ノ丸及び内堀周辺の既調査地点

第2図 調査区位置図



第3図 豊後国府内藩御家中名前付（部分）
 (※ P. 313 府内城三ノ丸遺跡 1993 大分県教育委員会)

(参考文献)

- 大分市教育委員会2012『府内城・城下町8』
- 大分市教育委員会2014『府内城・城下町10』
- 大分市史料編さん委員会1987『大分市史』中
- 吉田寛1993『府内城三ノ丸遺跡』大分県教育委員会
- 吉田寛1994『府内城三ノ丸遺跡Ⅱ』大分県教育委員会
- 大分市歴史資料館1995『豊後府内城』

第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

今回の発掘調査は266㎡を対象として実施した。調査地区は府内城の三ノ丸に該当する。

当該地区とこれまでの調査区との位置関係を再度確認すると、平成3年度に県教育委員会が大分県共同庁舎（現、県庁舎新館）建設工事に伴う調査の第1次調査区西側に位置し、江戸時代の木村家屋敷西端付近にあたることとなる。

本調査区を含む周辺一帯の三ノ丸南西域は明治以降教育機関や行政機関が設置されるなど、行政・教育の中核部として機能することとなった。これに伴う施設建設により江戸時代に営まれた武家屋敷は姿を消し、木村家が屋敷を構えた万治元年から平成26年までの変遷をみると、明治以降大きく変貌したことがこれまでの当該地区の調査で知ることができる。

調査の過程において、当該調査地区が近代以降の造成や建物基礎によって近世の生活面が大きく消失していることを確認した。したがって、本調査区が本来の武家屋敷としての内容を明確に知ることが困難な状態であった。

第2節 遺構（第4図～第7図）

本調査区では、近代の遺構を含めて24基の土坑、9基のピットを検出した。

基本層序（第5図）は調査区西壁（土層断面1）と北半部（土層断面2、3）の3箇所を観察した。

土層断面1では、調査区西辺部の南北方向土層堆積を観察した。現地表から0.7m～1.3mまで近現代の造成に伴う掘削が及んでいる。表土下に厚さ0.7m程度の造成土（a層）がみられ、その下層ではコンクリートブロックを含む二次堆積土が8層ほど（b層～i層）観察でき、深い箇所では地山の砂層に達している。二次堆積下は地表下0.7m程で混焼土小ブロックを少量含む黒茶褐色土層（1層）、黄褐色土層（2層）、その下は地山の直上層に堆積した黄褐色砂質土層（3層）であった。地山は明黄褐色粗竜砂層となった。既往の調査所見から1～3層は共に近世の盛土の可能性がある。地山の明黄褐色砂層は地点によっては灰褐色の色調となる。

土層断面2では、7層を掘り込む焼土・炭化物を主体とする新旧の土坑を観察できる。9層には近世の瓦類が含まれており、火災処理の痕跡と思われた。7層は土層断面1の2層と対応する。

土層断面3では、現代の埋設物設置に伴う掘削がみられる。4層までは近現代の造成土と思われる。5層下の暗灰色砂層（6層）が地山である。

遺構は土坑（SK）24基、ピット（SP）9基である（第6・7図）。このうち、SK6・8は火災処理土坑と考えられた。

SK1は長径0.4m、短径0.35m、深さ0.2mほどの不整円形の平面形をもつ。上部に礎石状の配石がみられた。0.45m×0.3m不整形をなし、上面は平坦であった。周辺にこれと同様の配石や堀込みはないが、建物の礎石の可能性も想定された。堀込みの覆土から陶磁器の細片が若干出土した。

SK2は埋甕である。口径0.55m、器高0.4mの規模であった掘形はほぼ甕の形状と合わせた円形の土坑であった。機能は明確でないが、近現代に造られたと思われる。

SK3は楕円状の平面形が残っているが、西側の短辺を建物基礎で欠失しているため全体の形状は不詳であった。残存長1.15m、幅0.7m、深さ0.2m程の規模をもつが残存する先端部は細くなりながら立ち上がっていた。土坑内には焼土や炭化物が堆積し、特に床面直上には炭化物が残っていた。床面や壁面は被熱・硬化していた。遺構の性格は明確でないが、堆積土に製品の焼成痕跡はないため、カマド様の機能が考えられた。遺構確認面は高く近現代に構築されたと想定した。SK4とは北0.6mに並列する位置関係であった。

SK4は残存状態が西側を建物基礎、東側の端部を攪乱によって欠失しており、幅0.65mを確認できる程度で構造などは不詳であった。内部は床面と壁面全面にわたって強く被熱していた。SK3の同時期に併存したものと考えられた。



第4図 遺構配置図 (S=1/100)

S K 5 は北壁際で確認したが、北半部は調査区外であった。土坑は最大幅0.96mをもち、平面形は楕円形を呈するものと思われた。堆積土には陶磁器類、瓦片、礫、獣骨、焼土などが多く含まれており、廃棄土坑と想定された。出土した陶器瓶（4）、磁器段重（5）は18世紀後半代であった。また、獣骨は分析の結果、牛の肩甲骨とウサギ類の頭蓋骨であった。幕末の生活の一端を示すものといえよう。

S K 6 は土坑の南北と東側を攪乱で失っているが、土坑の規模は、残存する西壁の長さ3m、東西3.5m以上、深さ0.3mから、長径4m以上の大きさと想定された。埋土には焼土や瓦類を多量に含んでおり、火災処理土坑と考えた。相伴した陶磁器類は18世紀前半代であり、18世紀中頃に造られたと思われた。

S K 7 は調査区中央付近に位置した。北・西部を攪乱で大きく失っているが、径1.7m程度の円形を呈すると思われた。埋土から巴文をもつ軒丸瓦が出土した。

S K 8 は北壁中央付近に位置した。南北を建物基礎や植栽で失っているが、長径3m、短径1.7m程度の楕円形を呈する土坑と想定できた。埋土に焼土や磁器染付碗、白磁、陶器鉢、灯明皿、巴文や小菊文の瓦当文様をもつ軒丸瓦が出土した。焼土を多く含むことなどから火災処理土坑と考えた。出土した磁器は18世紀前半に比定できた。

S K 9 は調査区中央部、S K 7・13の南側に位置した。土坑は東西を攪乱と植栽で失っていた。平面形は径1m程度の円形を呈すると想定できた。埋土から磁器染付・猪口、広東碗、白磁猪口、陶器皿・鉢、瓦質焙烙・火鉢などが出土した。出土遺物の時期は18世紀前半～19世紀と幅があった。

S K 10 は北壁際にS K 8を切って造られていたが、遺構の大半をコンクリート基礎で失っていた。出土遺物には18世紀後半代の磁器染付と19世紀前半代の瓦質の箱火鉢などがあり、S K 8より後出であることが確認できた。

S K 11 は南半部を現在の溝で切断されていたが、隅丸方形を呈すると思われた。埋土は焼土ブロック主体層であった。

S K 12 はS K 11の西側に隣接した。南半を溝で切られていたが、円形を呈すると思われた。土坑内には0.1m～0.4mの礫が充填されていた。

S K 13 はS K 7の南側に隣接して造られていた。陶磁器類、瓦類が多く堆積しており廃棄土坑と考えられた。出土遺物には18世紀～19世紀の陶磁器・土師器皿を主体とし、17世紀前半の土師器皿や均整唐草文軒平瓦などが混在した状態であった。

S K 14 は調査区中央部やや西側に位置するが、大半をコンクリートの基礎で失われており、残存する南西部はS K 1・2に切られていた。径2m以上の規模をもつと思われるが形状は確認できない。均整唐草文軒平瓦や18世紀前半の陶胎染付が出土した。

S K 15 はS K 8を切って造られていたが東半部はコンクリートの基礎で失っていた。埋土から陶磁器類が出土しており、磁器染付皿は18世紀中頃～後半の時期を示していた。

S K 16 は西辺が調査区外となるが、幅1.1m、深さ0.4m、長さは1.5m～2mと想定される方形の土坑であった。土坑は近世の整地層と想定した3層を掘り込んで造られている。17世紀前半の土師器が出土していることから、整地時期を江戸初期とする可能性を考慮する必要がある。また、五輪塔の地輪が出土した。

S K 17 はS K 14とS P 6に切られ、S K 18を切っていた。したがって、南辺付近を残すのみ状況であり、規模、形状は不明であった。

S K 18 はS K 2・17に切られているが、径0.8m程度の平面形が円形と想定された。

S K 19 は調査区のほぼ中央部に位置し、S K 17・18に切られ、S K 20を切っていた。土坑は1.7m×1.1m、深さ0.15mの規模をもち、平面形が方形を呈していた。埋土には焼土・炭化物とともに陶磁器類、瓦類が多量に含まれており、さらにメガイアワビの貝殻が出土した。出土した陶磁器類から18世紀後半～19世紀の廃棄土坑と考えられた。

S K 20 はS K 19に切られているが、幅0.5m程度の平面形が方形と思われた。

S K 21は西半部が一部調査区外となるが、径1m、深さ0.35mの円形土坑であった。埋土から17世紀初頭前後の土師器や瓦片が出土した。

S K 22は調査区北西部に位置し、径0.9mの円形土坑であった。中央部のくぼみは木痕と思われた。

S K 23はS K 22の北側に位置し、径0.6m、深さ0.15mの円形土坑であった。

S K 24は調査区ほぼ中央部に位置し、径1.1m、深さ0.35mの不整形円形を呈した。埋土から17世紀初頭前後の陶器が出土した。

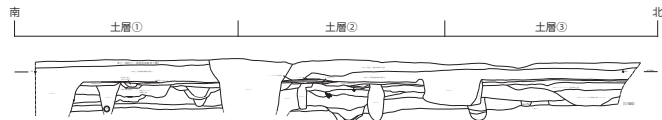
S K 25は調査区南部に位置し、径1mの円形土坑であった。18世紀前半代の陶磁器や巴文をもつ軒丸瓦が出土した。

ピットはS P 1～S P 9の9基を確認した。径0.3m～0.5m程度、深さ0.1m～0.3mの規模で平面形が円形を呈した。ピット群は主に調査区の南西部にみられたが有意な配列は確認できず、建物を復元には至らなかった。

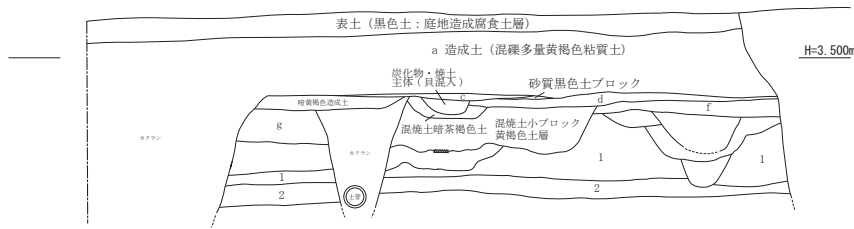
このように調査区では、建物基礎や攪乱が多く遺構は層ごとの確認することができない状況であったため、遺構の時期は出土遺物から比定した。

土坑を時期別に概観すると、17世紀前半：S K 16・24、17世紀中頃～18世紀前半：S K 6・8・25、18世紀後半～19世紀前半：S K 5・19のようになる。ただ、遺物が混在・偏在した可能性も考慮する必要がある。

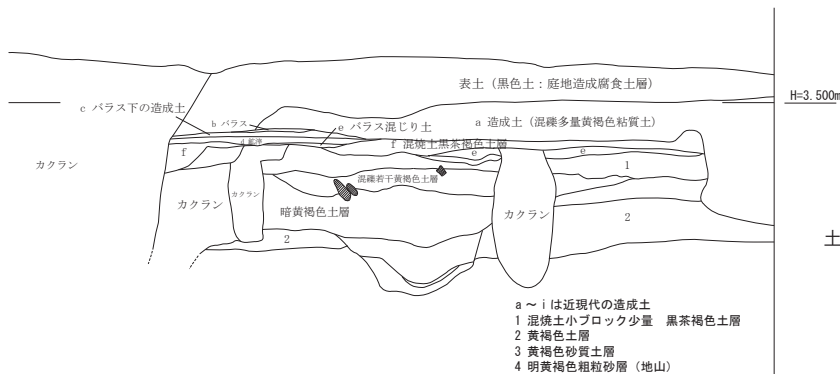
この結果、S K 6・8の火災処理土坑は寛保三年（1743）の火災に伴う可能性が高いと考えられる。



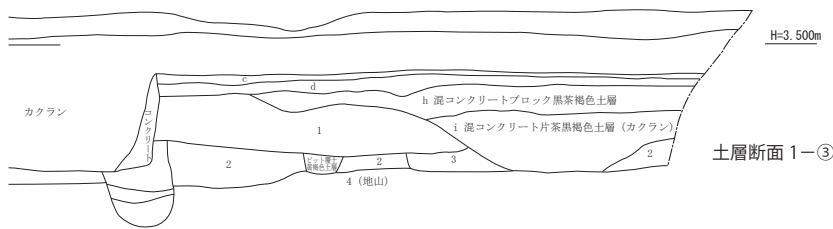
土層断面 1 (西壁) 区分図



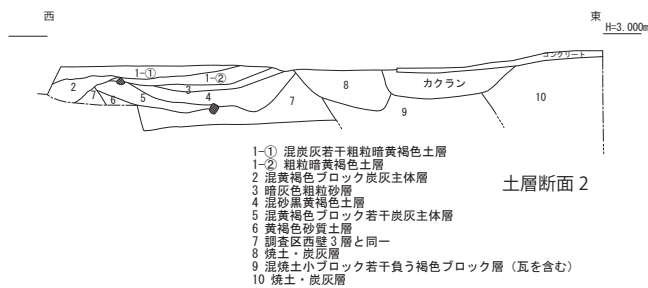
土層断面 1-①



土層断面 1-②

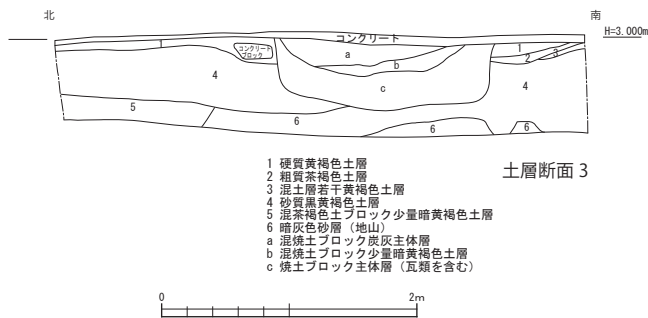


土層断面 1-③



土層断面 2

- 1-① 混炭灰若干粗粒暗黄褐色土層
- 1-② 粗粒暗黄褐色土層
- 2 混黄褐色ブロック炭灰主体層
- 3 暗灰色粗粒砂層
- 4 混砂混黄褐色土層
- 5 混黄褐色ブロック若干炭灰主体層
- 6 黄褐色砂質土層
- 7 調査区西壁3層と同一
- 8 焼土・炭灰層
- 9 混焼土小ブロック若干黄褐色土層 (瓦を含む)
- 10 焼土・炭灰層

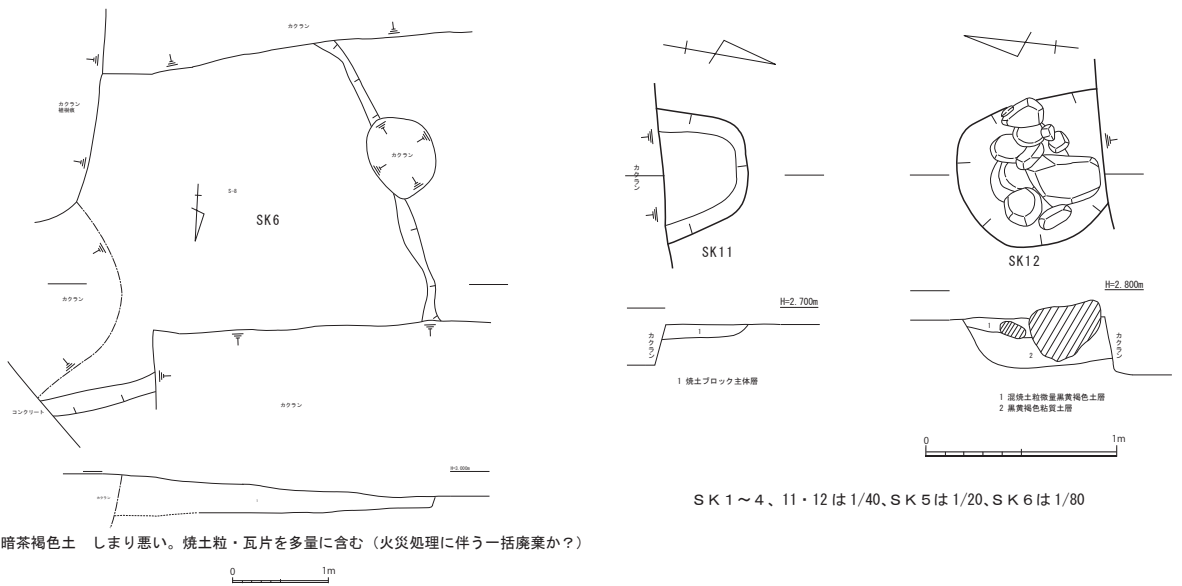
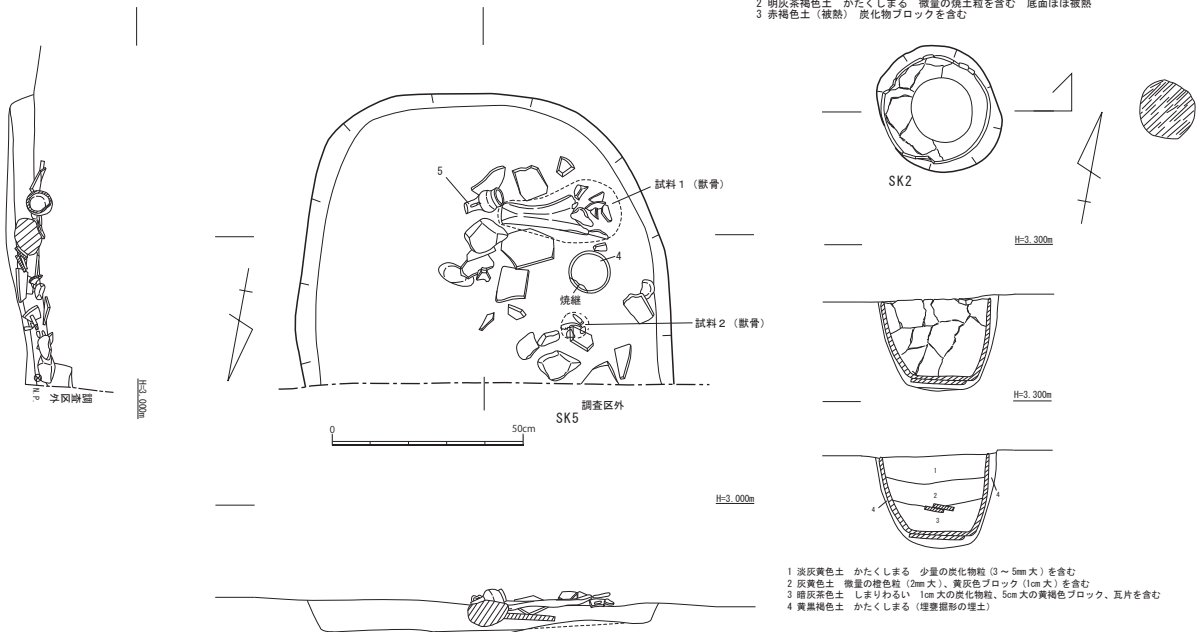
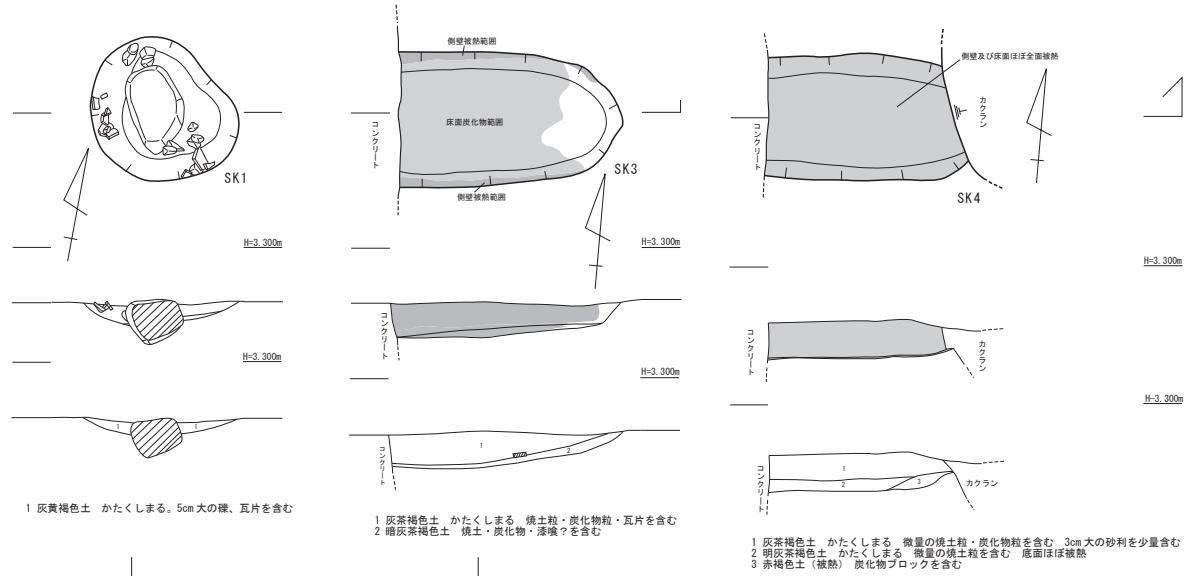


土層断面 3

- 1 硬質黄褐色土層
- 2 粗質茶褐色土層
- 3 混土層若干黄褐色土層
- 4 砂質黄褐色土層
- 5 混茶褐色土ブロック少量暗黄褐色土層
- 6 暗灰色砂層 (地山)
- a 混焼土ブロック炭灰主体層
- b 混焼土ブロック少量暗黄褐色土層
- c 焼土ブロック主体層 (瓦類を含む)

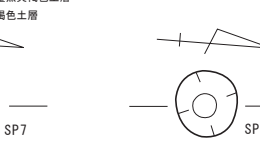
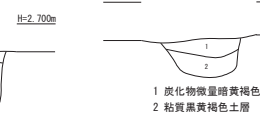
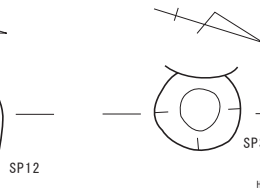
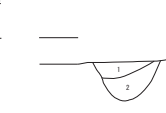
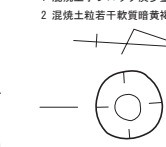
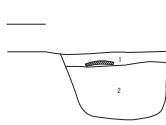
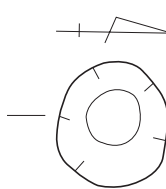
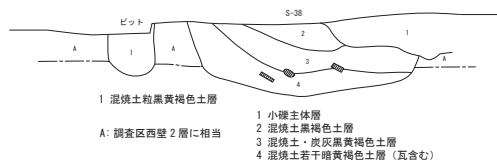
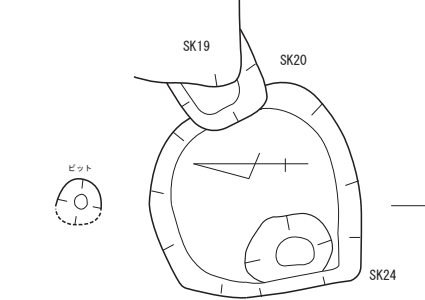
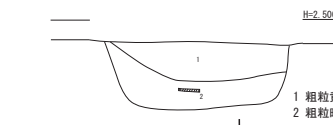
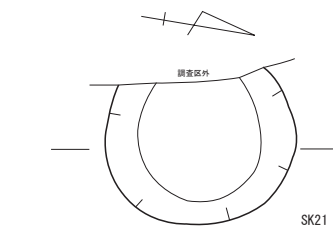
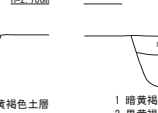
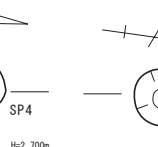
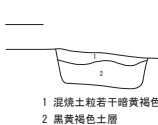
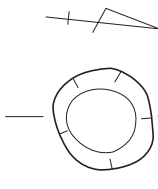
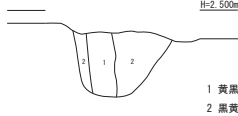
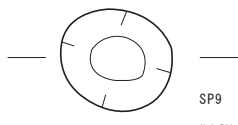
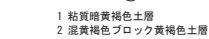
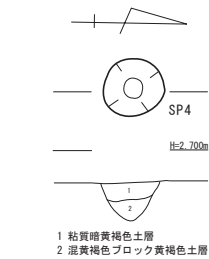
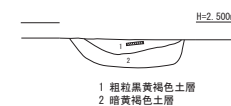
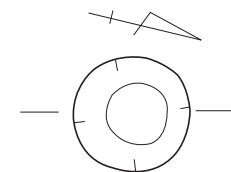
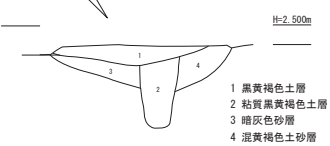
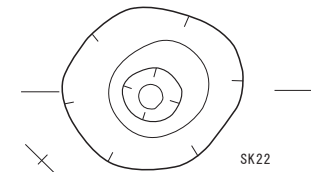
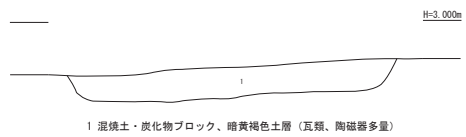
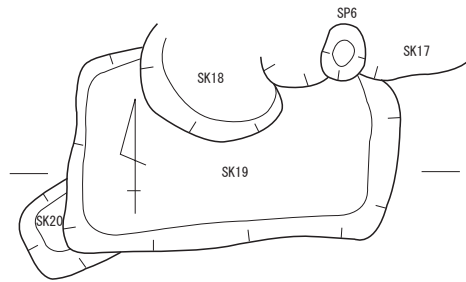
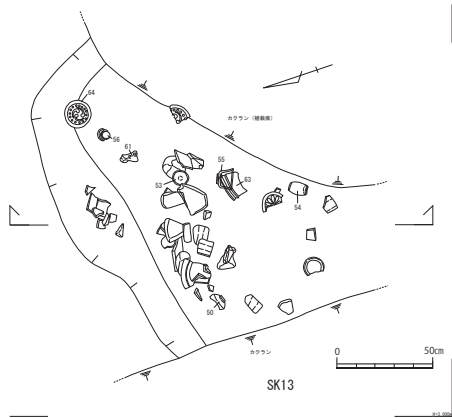


第 5 図 調査区土層断面図



SK 1 ~ 4, 11・12 は 1/40, SK 5 は 1/20, SK 6 は 1/80

第 6 図 遺構実測図 (1)



第7図 遺構実測図 (2)

第3節 遺物（第8図～第16図）

遺物は、土坑、ピット、整地層（包含層）から出土したもの、表土中から採取したものを図示した。

以下、遺構ごとに説明を行いたい。

S K 2（第9図2・3）2は肥前青磁香炉である。2/3が残っており、底部に「原」の墨書をもつ。製作年代は18世紀後半～19世紀中頃に比定できる。3は肥前磁器の戸車である。完形品であり、径4.8cm、厚さ1cmの大きさをもつ。製作年代は19世紀前半～中頃に比定できる。

S K 5（第9図4～6）4は肥前磁器染付段重のほぼ完形品である。口径10.5cm、器高2.5cmの大きさをもつ。器の縁部付近にかけて焼継がみられる。体部外面に草花文を施す。製作年代19世紀前半～中頃に比定できる。5は関西系の陶器瓶である。口頸部を欠くが、残存高10.4cm、底径4.7cmの大きさで、双耳をもつ。製作年代は18世紀後半～19世紀と比定できる。6は平瓦の破片である。端面に「細安」と思われる刻印をもつ。この刻印については、「細瓦師安太」を意味し、地名と製作工人を示すものと指摘されている（註1）。

S K 6（第9図7～19、第10図20）7は肥前磁器染付碗の1/2個体である。口径9.9cm、器高5.4cmの大きさをもつ。体部外面に牡丹唐草、裏底銘「大明年・・・」を確認できる。製作年代は18世紀前半に比定できる。8は肥前白磁小杯で口縁部付近を欠く。製作年代は1630年～1650年に比定できる。9は土鍾の完形品である。長さ4.7cm、幅2cm、孔径1cmの大きさをもつ。10は寛永通寶の完形品である。「寶」の最後の二画が「ス」となっており古寛永と思われる。11は瓦質の火鉢である。上縁部付近を欠失しているが、径16cm程度と思われる。製作地や時期は不明である。12～20は瓦類である。12～15は軒丸瓦で、瓦当文様は共に巴文である。4点共に珠文は15個、巴の展開は左回りの時計と逆回りである。巴文の形態に若干差がみられる。12・14は巴の尾部が次の巴の頭部をやや超える位置まで伸びる。13は尾部が長く次の巴の約1/3まで及ぶ。15の尾部は最も短く次の巴の頭部付近にとどまる。16～19は軒平瓦である。瓦当面が完全に残る16は中心飾は雄蕊状文で、その左右に2反転する唐草文と1単位の蔓草をもつ。蔓草は中心飾の横から派生し、第2唐草の上部まで伸びる。この基本形をもとに軒平瓦の破片についてみると、17は右展開の蔓草の一部、18・19はそれぞれ左右1/2の破片であるが中心飾・唐草文・蔓草ともに基本形と同様である。16～19は同一形態を示す同巧品といえる。府内城系列軒平瓦E群の古段階に該当し、下限年代を1740年代に比定されている（註2）。20は平瓦の破片である。軒平瓦E群と出土した磁器類に矛盾はない。

S K 7（第10図21・22）21・22は軒丸瓦の破片である。21は瓦当面を2/3程残しており、珠文10個と巴文を確認できる。珠文は復元すると10～13個あるものと想定される。巴文は尾部が細くやや長い特徴をもつ。22は1/6の破片である。珠文3個を確認できる程度である。

S K 8（第10図23～36、第10図37・38）23は京焼陶器碗の3/4個体である。口径9.2cm、器高6.4cm、底径5.6cmの大きさをもつ。体部外面に菖蒲文と「龍華」が施されている。24は肥前白磁猪口である。口縁部～底部の破片であるが、口径9cm、器高5.6cm、底径5.6cmの大きさである。優品と思われる。25は京焼陶器鉢である。口縁部～底部の破片で大きさは不明である。施釉貫入がみられる。珍品といえる。また、被熱を確認できる。26・27は土師器の灯明皿である。26は1/5個体の小破片で、口径10.7cm、器高1cm、底径5.4cmの大きさを復元できる。内面に煤が付着している。27は1/3個体の破片で、口径11.8cm、器高2cm、底径5.4cmの大きさを復元できる。内面は被熱し、黒変している。26・27は珍品である。28は土師質の焙烙で、口径31cm程の大きさを復元できる。23・24・28の製作年代は共に18世紀前半に比定できる。29～34は軒丸瓦である。29～31は時計と逆回りに展開する巴文と珠文の一部を残す破片である。33・34は小菊文の単弁であるが、破片のため花弁の構成数を確認できない。35・36は軒平瓦である。35は瓦当面3/4を残す均整唐草文軒平瓦である。中心飾に橘文をもち、中心飾から左右に2単位の文様が展開する。第2唐草に相当する葉文は細線彫りで構成されている。左上部を欠くが棧瓦と想定される。36は中心飾と右半部の大半を欠く。中心飾左側とそれから展開する唐草文、葉文の形状は37と同巧品である。左端部の形状から棧瓦であることを確認できる。吉田分類F-1群に当たり、18世紀中頃に比定されている（註2）。37・38は鬼瓦の破片である。37は左側の縁辺と外面に七曜文

の一部が残っているものと思われる。縁辺部には縦に3条の沈線が施されている。38は七曜文の一つと思われる破片である。37と同一個体の可能性もあるが、接合部位を確認していないため別図とした。この鬼瓦は形状や文様から既調査の木村家屋敷跡SK33出土鬼瓦の同類品と思われる(註1)。このように出土遺物は一括性が高いことから、SK8を寛保三年の大火に伴う火災処理土坑とする根拠といえよう。

SK9(第11図39~49)39は肥前磁器染付碗の1/2個体である。口径9.3cm、器高5.8cm、底径3.6cmの大きさをもつ。体部外面と輪宝繫文、裏底銘を施す。製作年代は18世紀後半に比定できる。40は肥前磁器広東碗である。底部を欠く2/3個体を残す。口径9.4cm、器高5cm以上の大きさである。体部外面に草花を施す。製作年代は1780年~1810年代に限定される。41は肥前磁器染付の猪口である。口径7.6cm、器高6.1cm、底径6cmを復元できる。体部外面に草花、口縁部内面に四方禪文を施す。製作年代は18世紀に比定できる。42は肥前磁器染付の筒形碗である。1/3が残っており、口径7cm、器高4.5cm以上を復元できる。体部外面には氷烈地に菊文を施す。製作年代は18世紀末~19世紀に比定できる。43は肥前白磁の猪口である。1/3が残っており、口径7.6cm、器高4.5cm、底径3.4cmの大きさを復元できる。製作年代は18世紀前半に比定できる。44は関西系の磁器碗である。底部を欠いており、口径6.8cm、器高4.3cm以上の大きさを復元できる。製作年代は18世紀後半~19世紀に比定できる。45は陶器皿の破片である。口径9cmを復元できる。製作年代は19世紀に比定できる。46は関西系の陶器鉢である。口縁部~体部下端の破片であるが、外面に牡丹文を確認できる。珍品と思われる。製作年代は18世紀後半~19世紀に比定できる。47は瓦質の焜炉の口縁部破片である。調整は内外面共に丁寧なヘラミガキがみられる。製作年代は19世紀と思われる。48は瓦質の火鉢の口縁部破片である。調整は外面にナデ、内面に横方向のハケ調整がみられる。製作年代は19世紀に比定される。49は煙管の吸口付近である。長さ5.7cm程残る。

SK10(第11図50~52)50は肥前磁器染付猪口の底部付近の破片である。底部は蛇ノ目凹形高台で、見込みには手描きの五弁花がみられる。製作年代は18世紀中頃~後半に比定できる。51は瓦質の箱火鉢の口縁部破片である。調整は内外面にナデを施している。製作年代は19世紀前半~中頃と思われる。52は土壁の一部である。横方向の成形痕がみられる。

SK13(第11図53~58、第12図59~68)53は肥前磁器染付碗の底部破片である。底径4cmの大きさをもつ。体部外面に牡丹唐草を施し、裏底銘に角福をもつ。製作年代は18世紀前半に比定できる。54は肥前磁器染付灰落しである。3/4個体を残す。口径6.2cm、器高9cm、底径5cmの大きさである。体部外面に牡丹唐草を施す。製作年代は18世紀に比定できる。55は肥前磁器染付香炉である。口縁部の一部を欠く。口径10.8cm、器高8cm、底径7.8cmの大きさである。56は肥前磁器染付掛花入の破片である。製作年代は18世紀後半~19世紀に比定できる。57は肥前白磁の猪口である。1/3を残し、口径9.6cm、器高6.4cm、底径4.2cmの大きさである。優品と思われる。製作年代は18世紀前半に比定できる。58は肥前陶胎染付碗の底部付近の破片である。体部外面に唐草文を施す。製作年代は18世紀前半に比定できる。59は京都系土師器の皿である。口径12.4cmを復元できる。製作年代は17世紀前半に比定できる。60・61は口縁部を欠く土師器の皿で、底部は回転糸切りで切り離されている。61は煤の付着があり灯明皿と思われる。62は土師質の焙烙で、口縁部付近の破片である。製作年代は18世紀前半に比定できる。63は唐津系陶器搗鉢である。製作年代は18世紀~19世紀に比定できる。64は軒丸瓦である。時計と逆回りに展開する巴文と珠文15個を配す。65・66は軒平瓦で均整唐草文軒平瓦である。65は中央飾から左側が残る。65は中心飾に三葉の桐葉文を橘文をもつ。桐葉には葉脈が表現されている。中心飾から2単位の唐草文が展開する。66は右半部が残り、中心飾の桐葉の一部と右に展開する2単位の唐草文がみられる。65・66共に軒平瓦B群(註2)に該当し、製作年代は17世紀前半に比定できる。67は鬼瓦の破片である。部位は明確でない。68は砥石である。片側の端部を欠失する。両面に使用痕が顕著に残っている。

SK14(第12図69~76)69は肥前陶胎染付碗である。1/3個体を残し、口径11cm、器高7cm、底径5cmの大きさを復元できる。体部外面に唐草を施文している。70~72は巴文をもつ軒丸瓦である。70は瓦当周縁部1/4を欠くが珠文15個を配すると思われる。71は珠文15個が残る。共に巴文の尾部は長い。72はやや小ぶり

珠文12個を配する。73～76は軒平瓦の破片である。73は中心飾が雄蕊状文で、その左に唐草文と蔓草を確認できる。76は左側の内区一部残す破片である。わずかに残る唐草の展開から派生する線状表現から軒平瓦B群（註2）に該当すると推定される。

S K 15（第12図77・78）77は肥前磁器染付皿の底部である。内面に菊花と思われる文様が施されている。底部は蛇ノ目凹形高台で筒江銘をもつ。製作年代は18世紀中頃～後半に比定できる。78は関西系陶器鍋の破片で、飯事道具（ミニチュア）である。

S K 16（第12図79・80）79は京都系土師器の皿である。底部を欠くが、口径12.2cm程の大きさをもつ。製作年代は17世紀前半に比定できる。80は五輪塔の地輪である。34cm×32cmの方形を呈し、厚さ22cmの大きさをもつ。

S K 19（第13図83～93）83は肥前磁器染付の紅皿である。口径6.9cm、器高3.0cm、底径2.8cmの大きさをもつ。外面に竹笹の文様が施されている。84は肥前磁器染付皿である。口径6.8cm、器高3.5cm、底径2.8cmの大きさをもつ。外面に竹笹の文様が施されている。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。85は肥前磁器染付広東碗である。口径11.4cm、器高6.2cm、底径6.8cmの大きさをもつ。外面に草花の文様が施されている。製作年代は1780年～1810年代に限定される。86は肥前磁器染付碗でいわゆる「くらわんか」とされるものである。口径10.2cm、器高3.8cm、底径4.8cmの大きさをもつ。外面に草花の文様が施されている。製作年代は18世紀後半に比定できる。87は信楽系陶器碗である。口径9cm、器高5cm、底径3.5cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。88は関西系陶器土瓶である。口径9.8cm、器高11.9cm、底径7cmの大きさをもつ。製作年代は19世紀に比定できる。89は土人形の破片である。90は玉砂利である。径3.5cmの円形を呈し、厚さ1cmの大きさをもつ。91は砥石である。片方の端部を欠く。平面・断面形は長方形を呈し、上下左右の4面、端面の全面に使用痕が顕著であった。92は火打ち石と思われる。長さ2.8cm、幅2.4cm、重さ11.5gである。93は軒丸瓦の瓦当面約1/2個体である。

S K 21（第13図94）94は京都系土師器皿である。口径12.4cm程を復元できる。製作年代は16世紀末～17世紀頃と考えられる。

S K 24（第13図95～97）95は瀬戸美濃陶器皿である。口径10.2cm、器高1.7cm、底径5.4cmの大きさをもつ。製作年代は1590年～1600年代の大窯Ⅳ期とされる。96は唐津陶器鉢（絵唐津）である。口縁部欠く。製作年代は18世紀後半1590年～1610年代に特定される。97は軒平瓦である。中心飾と右半部を欠くが、左に展開する2単位の唐草文がみられることから、軒平瓦B群（註2）に該当する可能性がある。

S K 25（第13図98～102、第13図103～105）98は肥前磁器碗である。口径9.4cm、器高4.6cm、底径4cmの大きさをもつ。外面に草花の文様が施されている。99は肥前陶胎染付碗である。口径11.4cm、器高7.46cm、底径5.2cmの大きさをもつ。98・99の製作年代は18世紀後半に比定できる。100は肥前磁器染付皿である。口径22.4cm、器高3cm、底径14cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀前半に比定できる。101は瓦質の香炉である。口径11.6cm、器高5.9cm、底径7cmの大きさをもつ。製作年代は不明である。102は円形の銅製品である。家具等の金具と思われる。103は軒丸瓦である。巴文は時計と逆回りに展開する。珠文は15個を配す。104は軒丸瓦の1/3個体である。巴文は時計と逆回りに展開する。105は軒平瓦で、左半部を残す。第2唐草に相当する部分の形状から、軒平瓦D-2群（註2）に該当する。

S P 4（第13図81・82）81・82は共に景德鎮白磁皿の底部である。製作年代は16世紀後半である。

以下、A・B・C各地区の包含層出土遺物及び表採資料について説明を行いたい。

A区包含層（第14図106～115、第15図151・152）106は中国製（清朝）磁器小杯である。口径8.2cm、器高4.3cm、底径3.6cmの大きさをもつ。外面に捻花文、見込みに草花が施されている。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。107は肥前磁器猪口である。口径8.2cm、器高6.6cm、底径6cmの大きさをもつ。外面に竜文が施されている。製作年代は18世紀に比定できる。なお、二次的な被熱を受けている。108は肥前磁器蓋である。口径8.2cm、器高4.3cm、底径3.6cmの大きさをもつ。外面に竹笹文が施されている。製作年代は18世紀

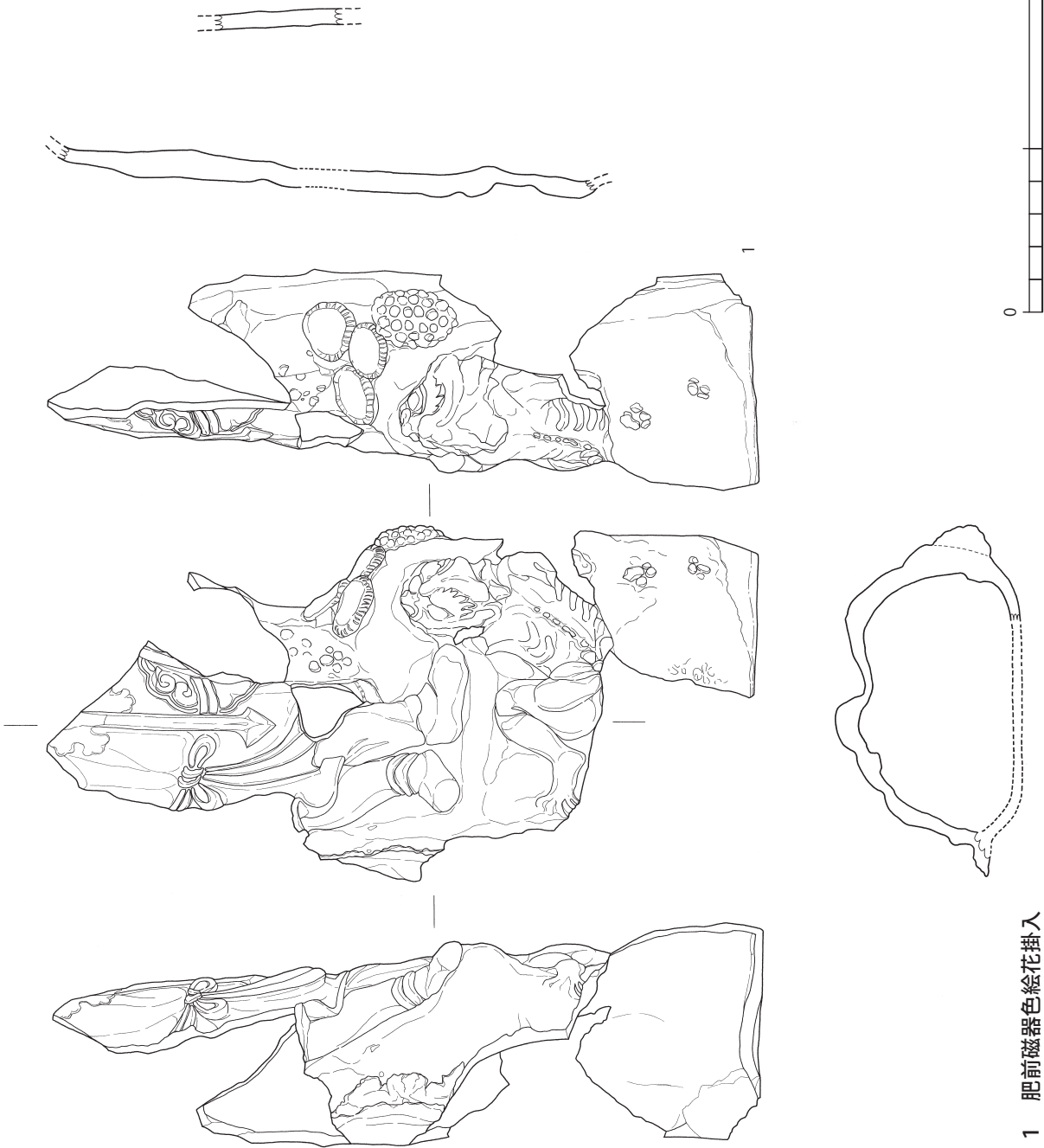
前半に比定できる。なお、二次的な被熱を受けている。109は肥前白磁小皿である。口径7.4cm、器高1.6cm、底径4cmの大きさをもつ。製作年代は17世紀中頃～後半と思われる。110は福岡産と推定されるが、器種は不明で花入れの可能性がある。残存長13cm程である。製作年代は18世紀と推定される。111は関西系の陶器と思われるが、器種は不明である。球体状の体部をもつ。製作年代は18世紀と推定される。112は京焼の鉢である。製作年代は18世紀後半～19世紀と推定される。なお、二次的な被熱を受けている。113は京都系土師器皿である。口径10.4cm、器高2.4cmの大きさをもつ。製作年代は17世紀前半に比定できる。114は関西系陶器唾壺である。口径6.6cm、器高6cm、底径3.2cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。115は陶器の挿鉢形を呈する飯事道具（ミニチュア）である。口径8.8cm、器高3.9cm、底径4.7cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀～19世紀と推定される。151・152は軒平瓦である。151は橘文の中心飾から右半部が残る。152は左半部が残っており、端部の形状から棧瓦であることが確認できた。共に軒平瓦F-1群に該当する。製作年代は18世紀中頃とされている。

B区包含層（第8図1、第14図116～124、第15図125～132、第16図153～163）1はB区包含層から出土した肥前磁器色絵掛花入である。上部を大きく欠くが、鍾馗を現し、足下に邪鬼を配した意匠を確認できた。残存高21.6cm、最大幅を10.8cmの大きさをもち、成形は型打である。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。116は肥前磁器色絵碗である。口径9.3cm、器高5.6cm、底径3.6cmの大きさをもつ。外面と見込みに文様が施されている。製作年代は18世紀に比定できる。117は肥前青磁染付碗である。口径11cm、器高6.9cm、底径3.8cmの大きさをもつ。見込みに五弁花くずれ、底部外面に渦福くずれが施されている。製作年代は18世紀後半に比定できる。118は肥前白磁猪口である。口径4.4cm、器高3.3cm、底径3cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀前半に比定できる。119は肥前白磁紅皿の完形品である。口径4.6cm、器高1.3cm、底径1.6cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀前半に比定できる。120は肥前白磁の飯事道具（ミニチュア）である。口径2.4cm、器高1.1cm、底径0.9cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。121は肥前陶器碗で京焼風を呈す。口径9.4cm、器高6.5cm、底径4.8cmの大きさをもつ。外面に山水文、見込みに文様を施している。また、赤絵を用いており珍しい例といえる。底部外面には刻印がみられる。製作年代は18世紀前半に比定できる。122は肥前陶器碗で京焼風を呈する。口径8.4cm、器高5cm、底径4.9cmの大きさをもつ。外面に山水文が施されている。製作年代は17世紀後半～18世紀前半に比定できる。123は信楽系陶器碗である。口径8.7cm、器高3.1cm、底径5.3cmの大きさをもつ。製作年代は19世紀に比定できる。124は信楽系陶器碗である。口径8.8cm、器高4.7cm、底径3.4cmの大きさをもつ。外面に若杉文を施した、いわゆる「小杉碗」ある。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。125は陶器碗である。口径11.2cm、器高8.3cm、底径4.8cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀前半に比定できる。126は信楽系陶器碗である。口径9.2cm、器高5.2cm、底径3.4cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。127は京都系土師器皿である。口径9.2cm、器高1.5cmの大きさをもつ。製作年代は17世紀前半に比定できる。128は土師器の皿である。底部を欠くが、口径14cm、器高2.3cmを復元できる。搬入品と思われ、良品である。129は土師器の焼塩壺である。口径4.8cmを復元できる。製作年代は17世紀前後と思われる。130は土師器焙烙の破片である。口径30cm程を復元できる。製作年代は18世紀前葉と思われる。131は土人形の破片である。132は土師器内黒碗である。体部から丸みを帯びて立ち上がり、口縁端部は短く外反する。高台をもつ。口径13cm、器高5.3cm、底径6.2cmを復元できる。製作年代は9世紀～10世紀頃と思われる。153～156は軒丸瓦である。153は巴文が時計と逆回りで、珠文は15個を配する。154は径17.8cmと大形に属す。155・156は破片であるが、156は時計と逆回りの巴文を確認できる。157～162は軒平瓦である。157は中心飾が雄蕊状文、2単位の唐草文から軒平瓦分類K群の可能性がある。158は中心飾が三葉文で第2唐草の形状が線状となるD-2群、159は棧瓦で、中心飾に橘文、唐草文の形態からF-1群、160は中心飾が三葉文、2単位の唐草文からD-1群に該当する。161は左端部の破片であるが唐草文からD-1、162は右端付近の破片であるが唐草の形状からC-1の可能性がある。163は鬼瓦の破片である。

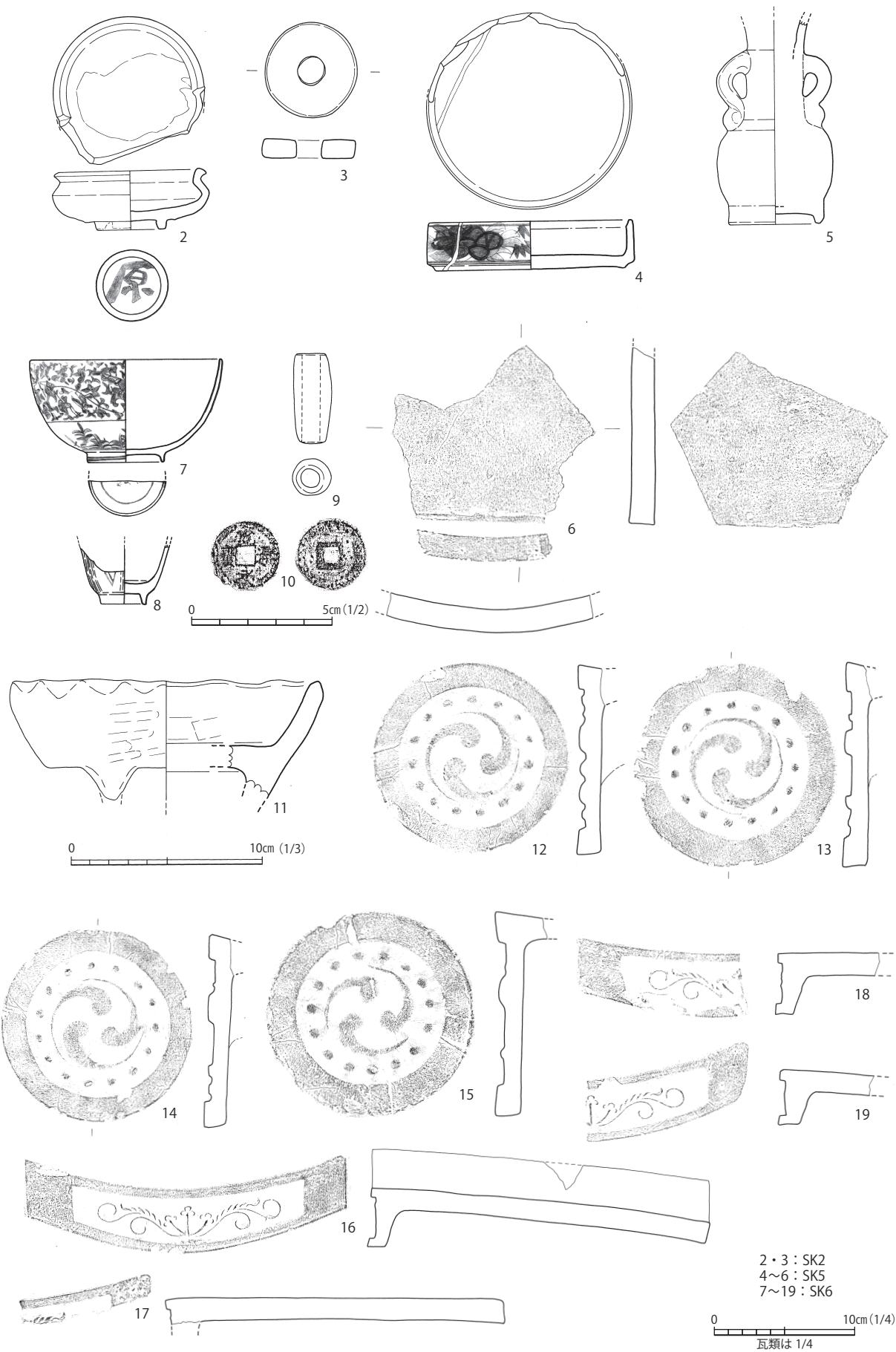
C区包含層（第15図133～143、第16図164・165）

133は肥前磁器染付蓋である。広東碗の蓋と考えられる。口径10.4cm、器高3cm、底径5.3cmの大きさをもつ。製作年代は1780年～1810年代に特定される。134は肥前青磁染付筒形碗である。口径7.8cm、器高6.5cm、底径4.2cmの大きさをもつ。見込みに手描きの五弁花、底部外面に『筒江』銘を施す。135は肥前白磁紅皿のほぼ完形品である。口径4.8cm、器高1.3cm、底径1.4cmの大きさをもつ。製作年代は18世紀後半～19世紀に比定できる。136は肥前磁器染付小杯である。口径7.1cm、器高2.3cm、底径4.6cmの大きさをもつ。外面にコンニャク印判の桐文を施す。製作年代は17世紀末～18世紀前半に比定できる。137は肥前陶器碗で京焼風を呈す。口径9.2cm、器高6.8cm、底径3.5cmの大きさをもつ。製作年代は17世紀後半～18世紀前半に比定できる。138は信楽系陶器碗である。口径9.1cm、器高4.9cm、底径3.2cmの大きさをもつ。製作年代は19世紀前半～中頃に比定できる。139は関西系陶器鉢で、京焼風を呈す。140は陶器皿の破片である。製作年代は19世紀頃と思われる。141～143は京都系土師器皿である。製作年代は17世紀前半に比定できる。164は軒丸瓦で、巴文が時計と逆回り、珠文を15個配する。165は中心飾が三葉文、第2唐草部分の形状が線状となるD-2群に該当する。ただ、同じ木村家屋敷跡出土例（註1SK33）と比較すると本例は三葉文が細く、第2唐草部分の形状が太い特徴が窺える。

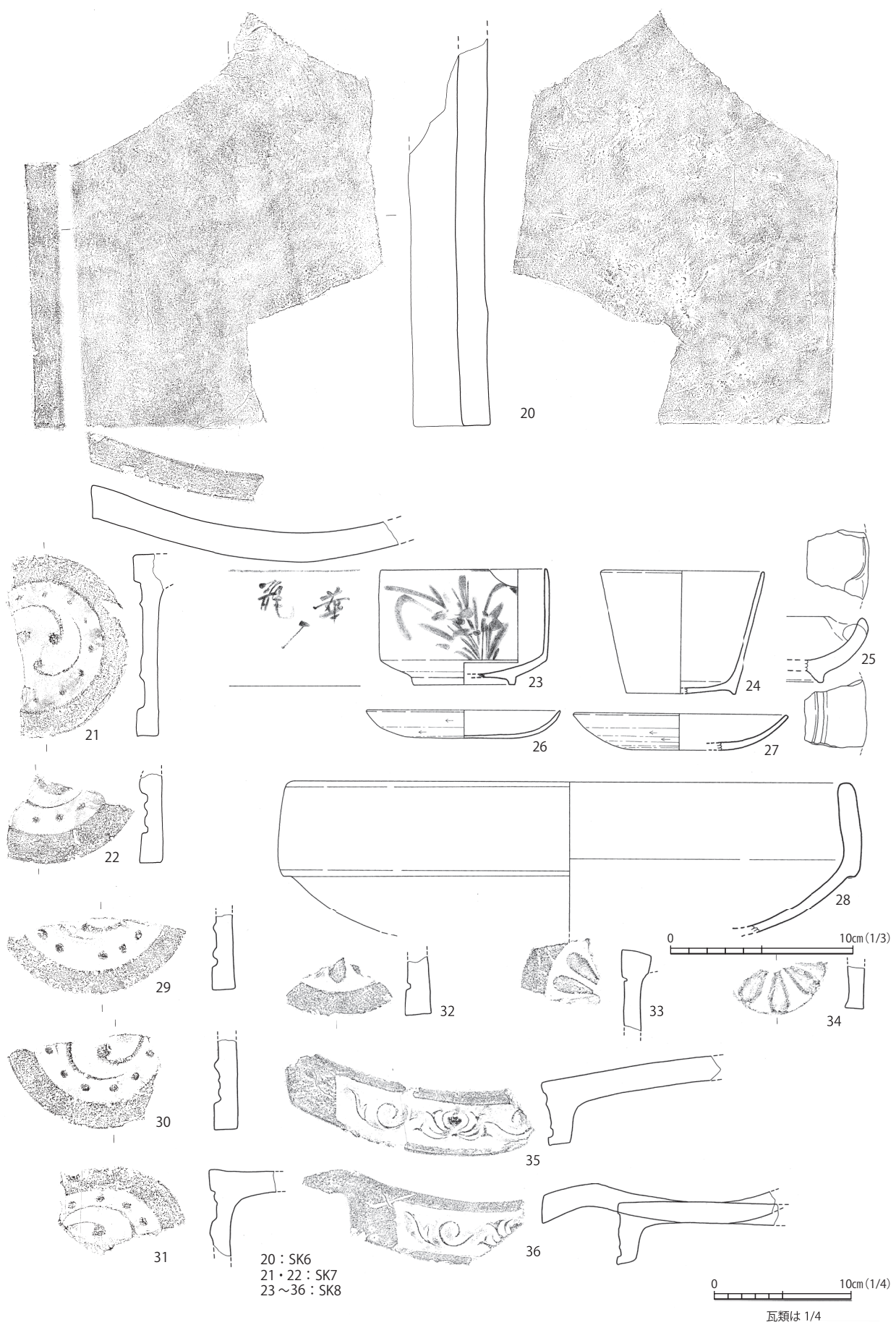
表土中採取資料（第15図144～150）144は肥前磁器染付紅皿である。口径5.9cm、器高2.5cm、底径3.5cmの大きさをもつ。製作年代は17世紀後半～18世紀前半に比定できる。145は肥前青磁染付碗である。146は肥前磁器色絵瓶である。147は肥前磁器のほぼ完形品であるが、器種は特定できない。口径4.8cm、器高7.2cm、底径5.6cmの大きさをもつ。145～147は共に8世紀後半～19世紀に比定できる。148は小柄で刃部を欠き、柄の部分と思われる。149・150は赤間石の硯の破片である。海部に使用痕を確認できる。



第8図 出土遺物実測図 (1) 1 肥前磁器色絵花掛入



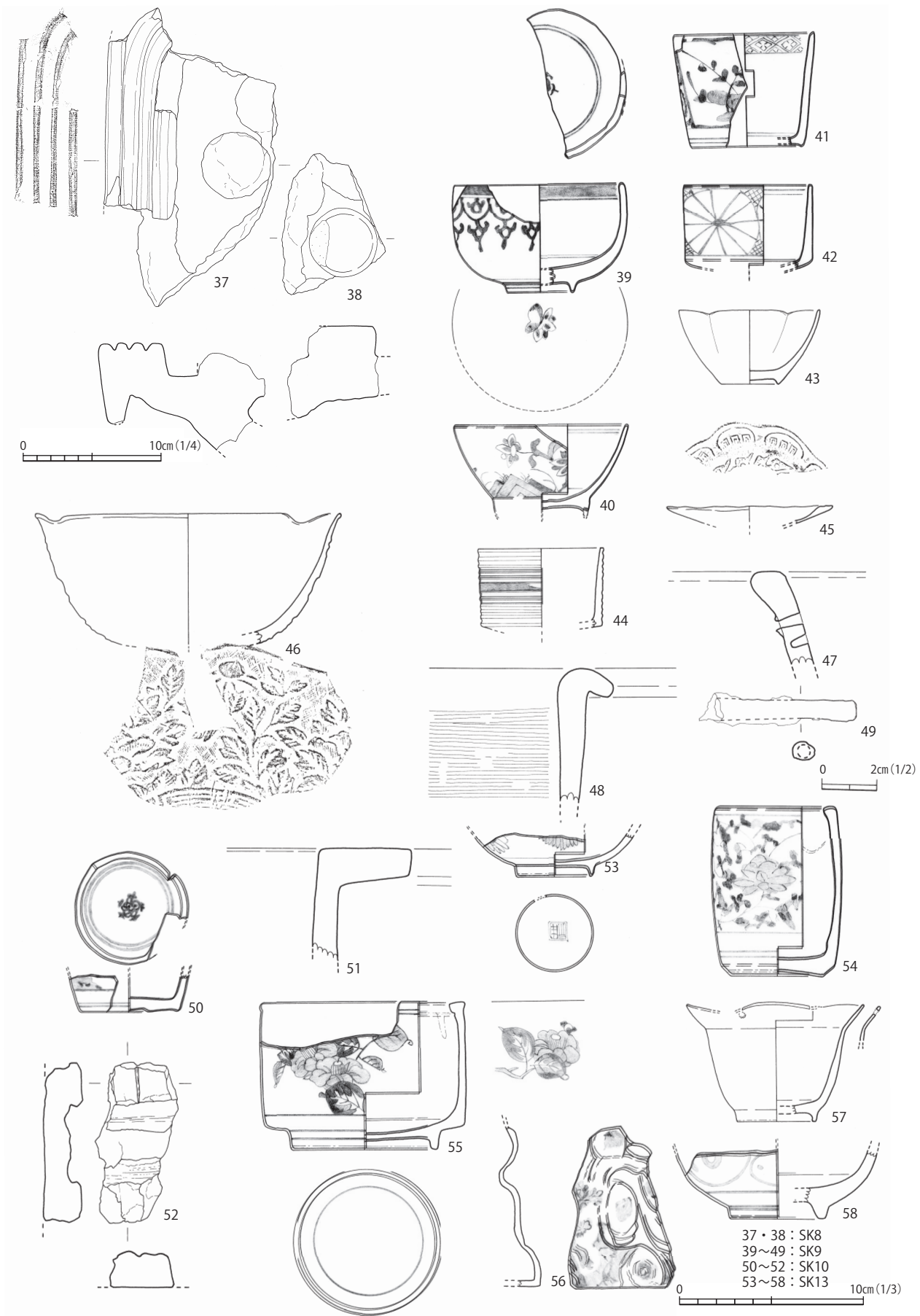
第9図 出土遺物実測図 (2)



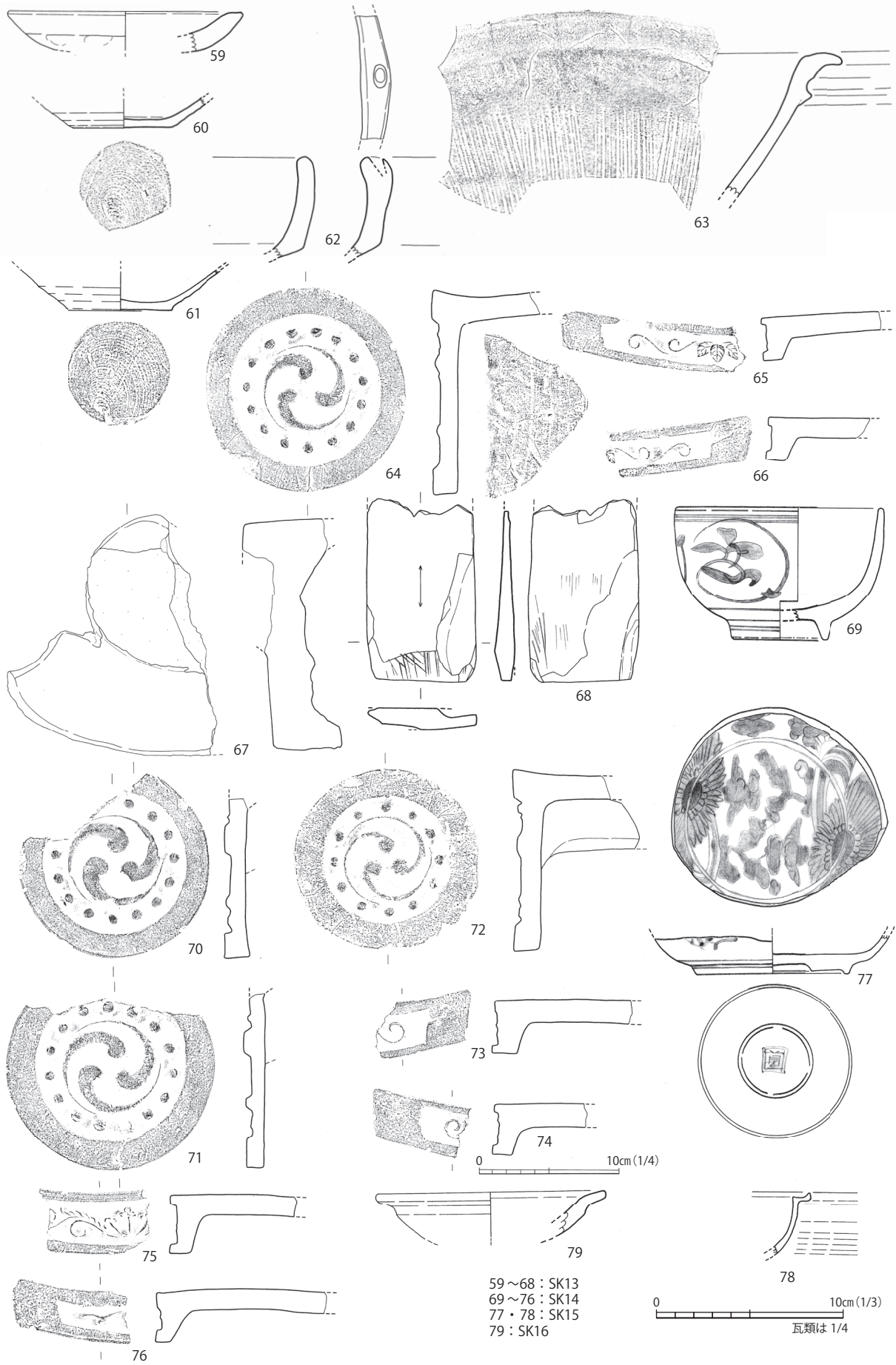
20 : SK6
 21・22 : SK7
 23～36 : SK8

0 10cm (1/4)
 瓦類は 1/4

第 10 図 出土遺物実測図 (3)



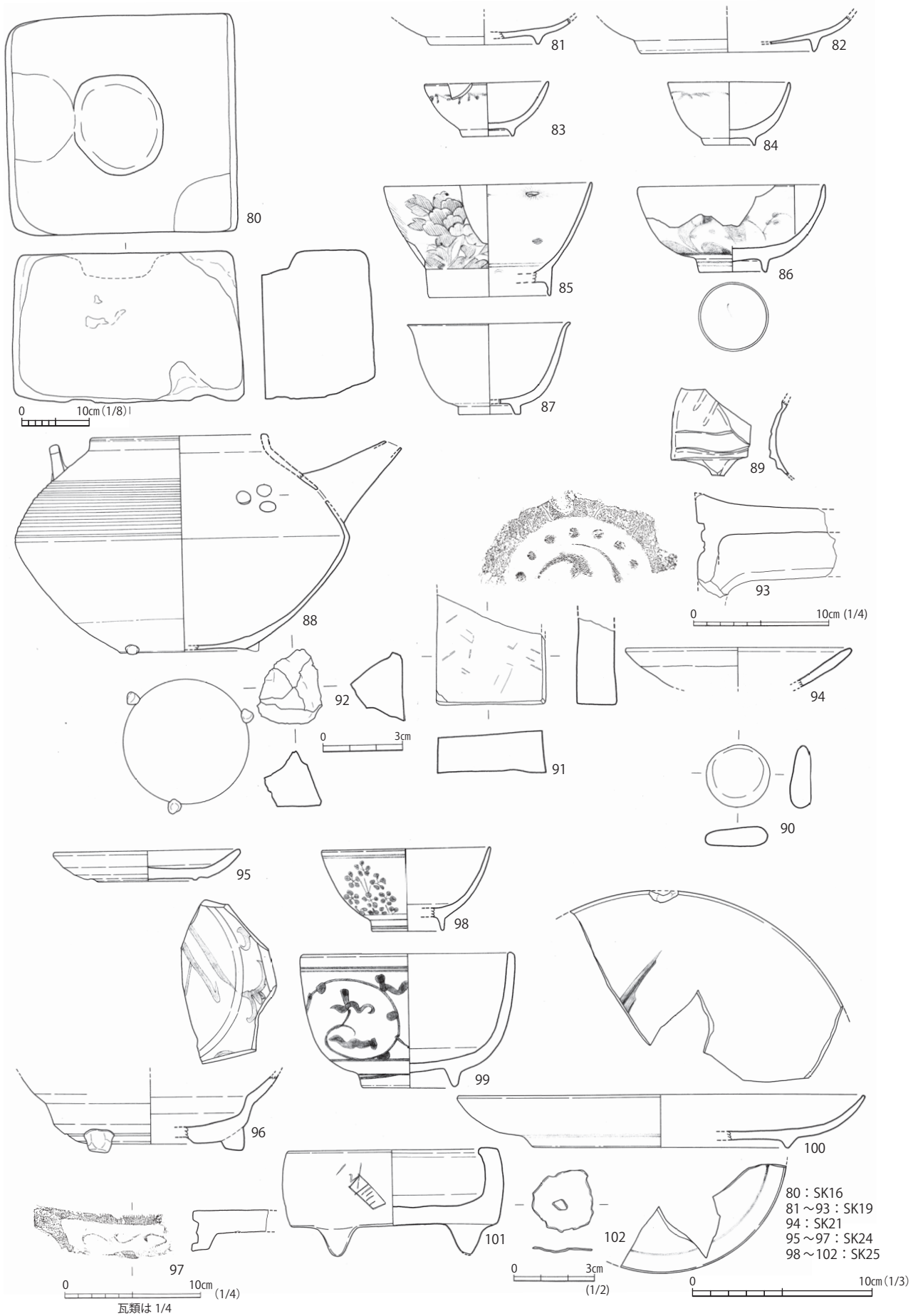
第 11 図 出土遺物実測図 (4)



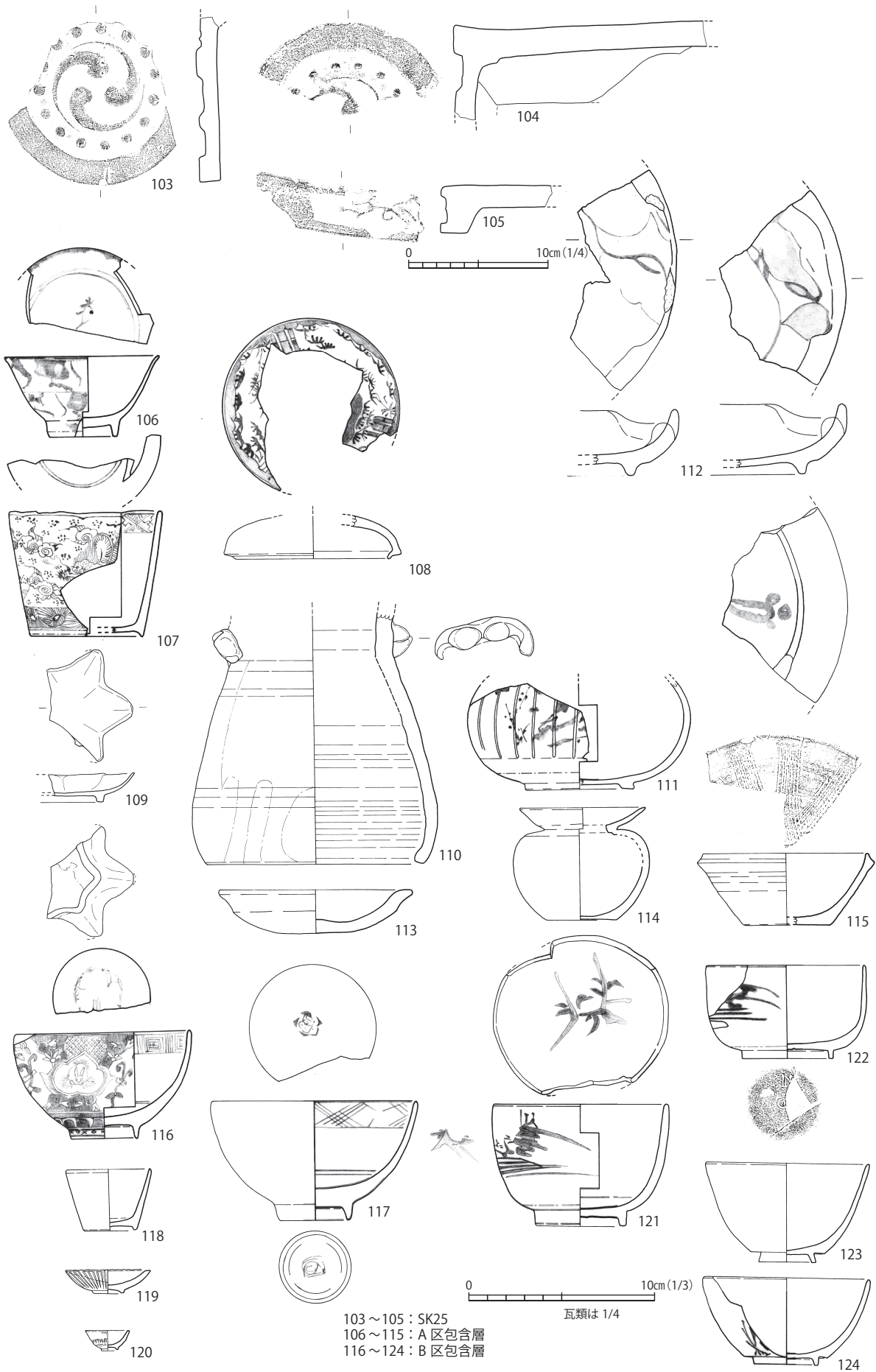
59~68 : SK13
 69~76 : SK14
 77・78 : SK15
 79 : SK16

0 10cm (1/3)
 瓦類は 1/4

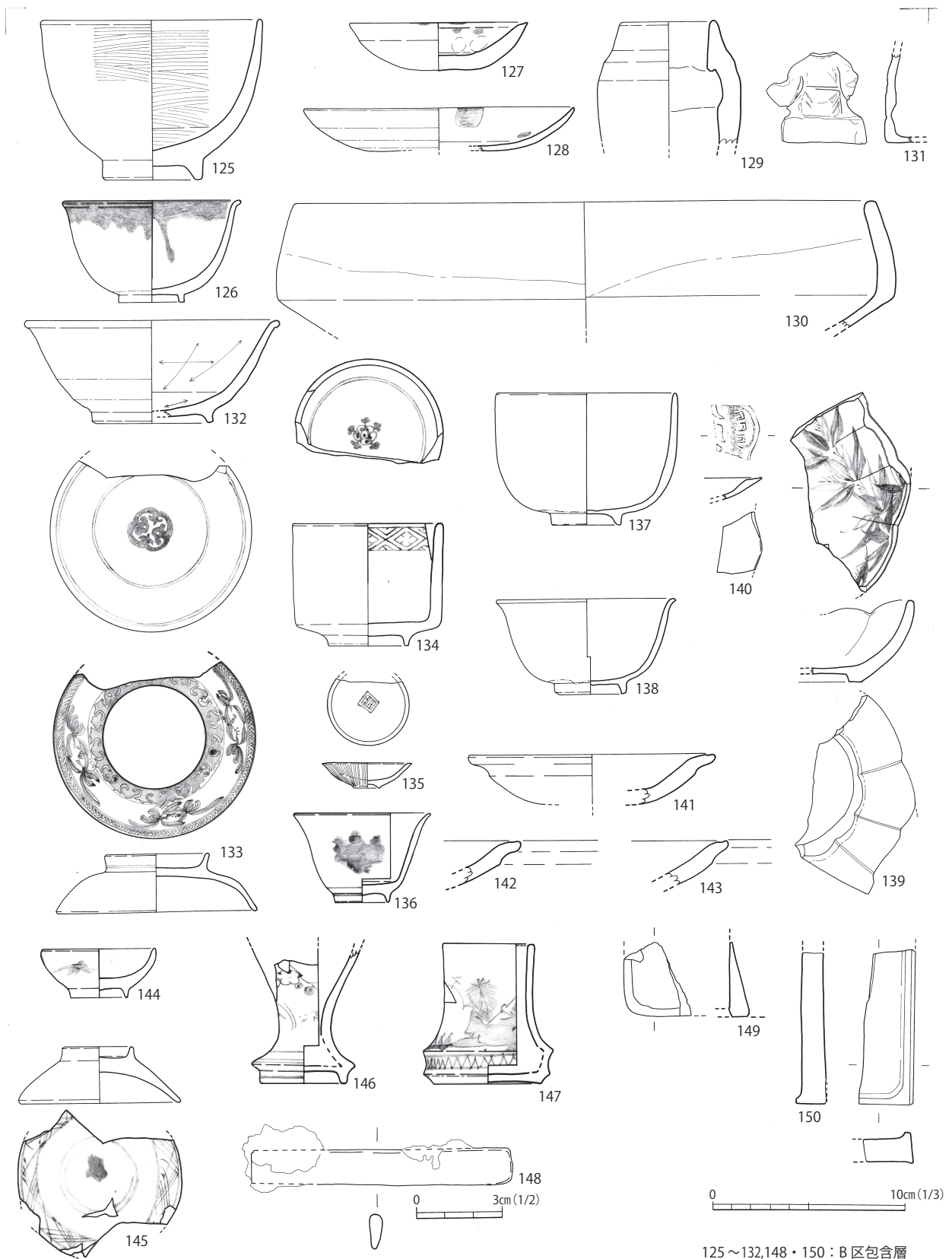
第 12 図 出土遺物実測図 (5)



第 13 図 出土遺物実測図 (6)

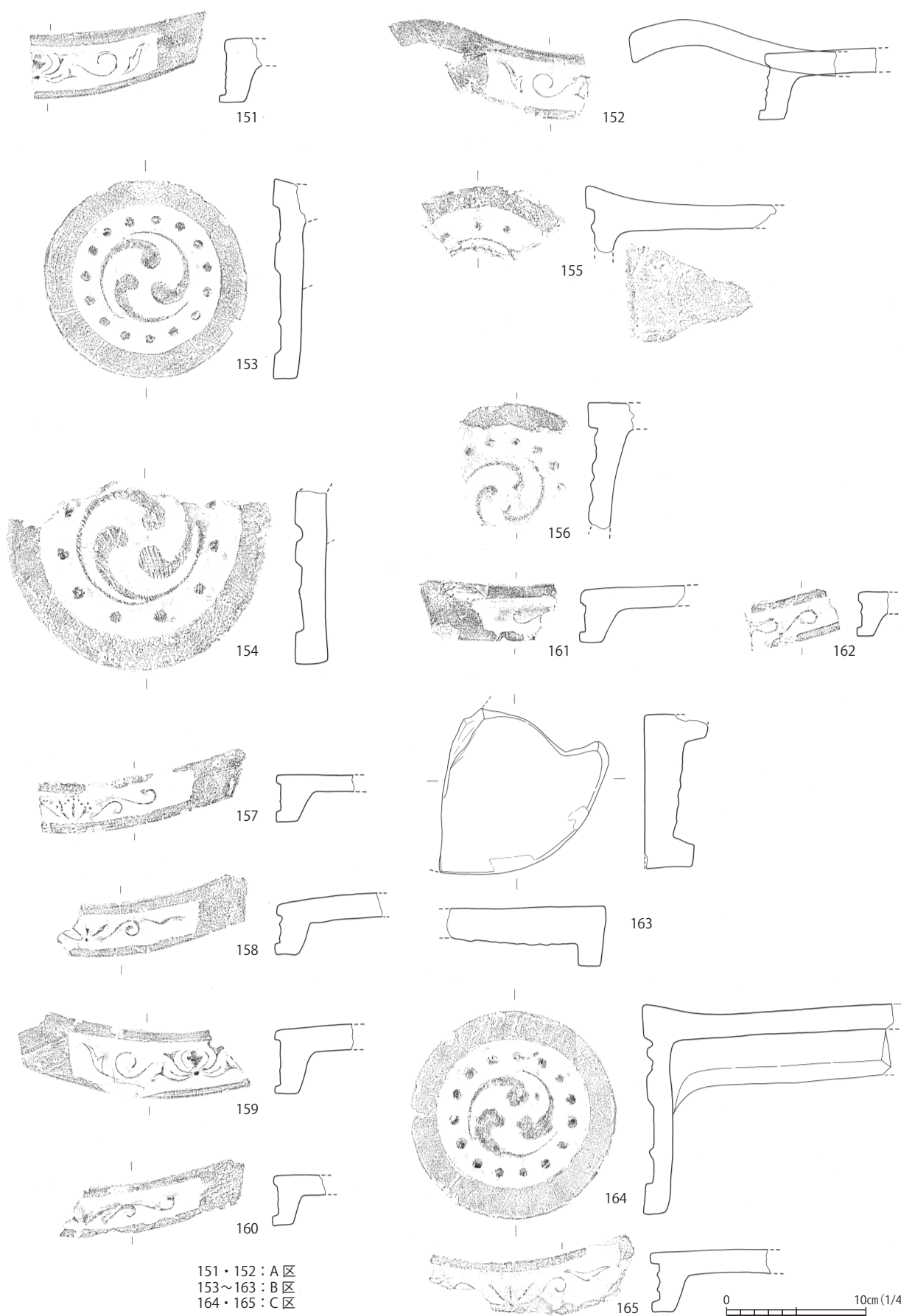


第14図 出土遺物実測図(7)



125~132,148・150：B区包含層
 133~143,149：C区包含層
 144~148：表採

第15图 出土遺物実測図(8)



151・152：A区
 153～163：B区
 164・165：C区

第16图 出土遺物実測図(9)

出土遺物について（第17・18図）

今回の調査で出土した江戸時代の遺物について、時期別に概観したい。

陶磁器・土器類（第17図）

17世紀前半：京都系土師器（59・113・127・141）は器壁が厚くこの器種としては最終段階の型式に当たる。肥前白磁の小杯（8）は製作年代が1630年～1650年とされる。白磁小皿（109）は17世紀中葉から後半にあてられる。土師質の焼塩壺（129）などもみられる。

17世紀後半～18世紀前半：肥前磁器染付小杯（136）は17世紀末頃、陶器碗（122・137）は17世紀後半～18世紀前半、肥前磁器碗（98）、肥前白磁猪口（43・57・24・118）、肥前磁器染付碗（7・53）・皿（100）、肥前磁器蓋（108）などの磁器と京焼陶器（23）肥前陶器碗（121）、陶器碗（125）、肥前陶胎染付碗（99）の陶器類、土師質焙烙（28）は18世紀前半である。口縁部に貫通孔のある把手をもつ焙烙（62）が出土している。

18世紀後半：肥前磁器染付碗（39・86）、肥前青磁染付碗（117）、肥前磁器染付猪口（50）、肥前磁器染付香炉（55）、肥前磁器染付皿（77）がある。

18世紀代：大まかな年代観で示した。磁器では肥前磁器色絵碗（116）、肥前磁器猪口（41・107）、肥前磁器染付灰落しなどがある。陶器では花入？（110）、関西系の陶器（111）などを示した。110は福岡産と推定される。

1780年～1810年代：肥前磁器染付広東碗（40・85）、蓋（133）は製作年代を特定される資料である。

18世紀後半～19世紀：中国産（清朝）磁器小杯（106）、肥前磁器では染付の筒碗（42）・皿（84）・紅皿（83・144）・掛花入、白磁紅皿（135）・飯事道具（120）、青磁蓋（145）・香炉（2）、色絵瓶？（146）などがある。関西系では磁器碗（44）、陶器瓶（5）・鉢（46）、唾壺（114）がみられる。信楽系では陶器碗（87・124・126）を確認した。このほか唐津系播鉢（63）もみられる。

19世紀前半～中頃：肥前磁器染付段重（4）、信楽系陶器碗（138）、瓦質の箱火鉢（51）などがある。

瓦類（第18図）

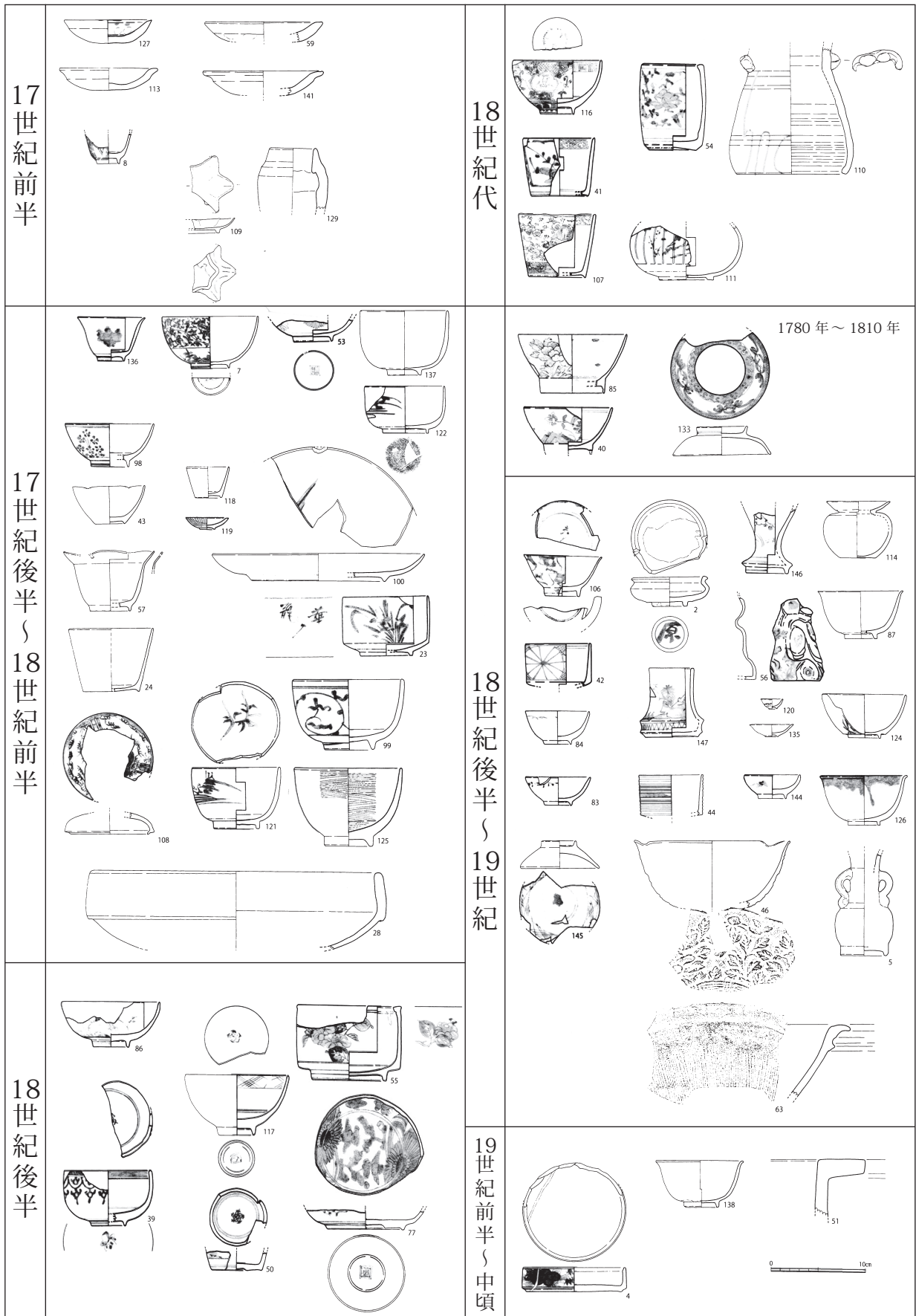
軒平瓦について時期別に概観したい。特に火災処理土坑 S K 6・8 の出土遺物は一括性の高い資料であった。今回の調査では軒平瓦を5種類した。現在、近世の府内城・城下町出土軒平瓦についてはA群～X群の細分を含め25種類に分類されており、この分類、年代観に従って説明を行う（註2）。調査で確認した5種類はB群、D群、E群古段階、F-1群、K群である。火災処理土坑の出土瓦に注目したい。

S K 6 出土軒平瓦は4点を確認した。種類は1つに限られる。E群（府内城系列軒平瓦）古段階に属し、現在確認されている3種類の1つに該当する。文様細部を異にする複数の范型の存在が想定されている。軒丸瓦の時期は17世紀末～18世紀前半に比定されている。共伴した軒丸瓦は巴文が時計と逆回りで珠文15個を配する点で共通する。15は尾部が短い特徴をもつが、共に同巧品といえる。さらに、出土した磁器（7・8）の製作年代は、8が17世紀中頃、7は18世紀前半と18世紀中頃に下ることはない。S K 8 出土軒平瓦は2点を確認した。種類は1つに限られる。F-1群に該当する。軒丸瓦の時期は18世紀中頃に比定されている。共伴した軒丸瓦は2種類6点を確認した。共に破片であるため文様構成全体は不明確である。ひとつは時計と逆回りの巴文と珠文を配する例である。31は尾部が細く S K 7 出土の21に近い。もう1種類は小菊文をもつ例である。小菊文12弁の単弁で構成される軒丸瓦と思われる。出土した陶磁器・土器類（24・23・28）の製作年代はすべて18世紀前半に比定でき、軒平瓦の年代観との相違はない。

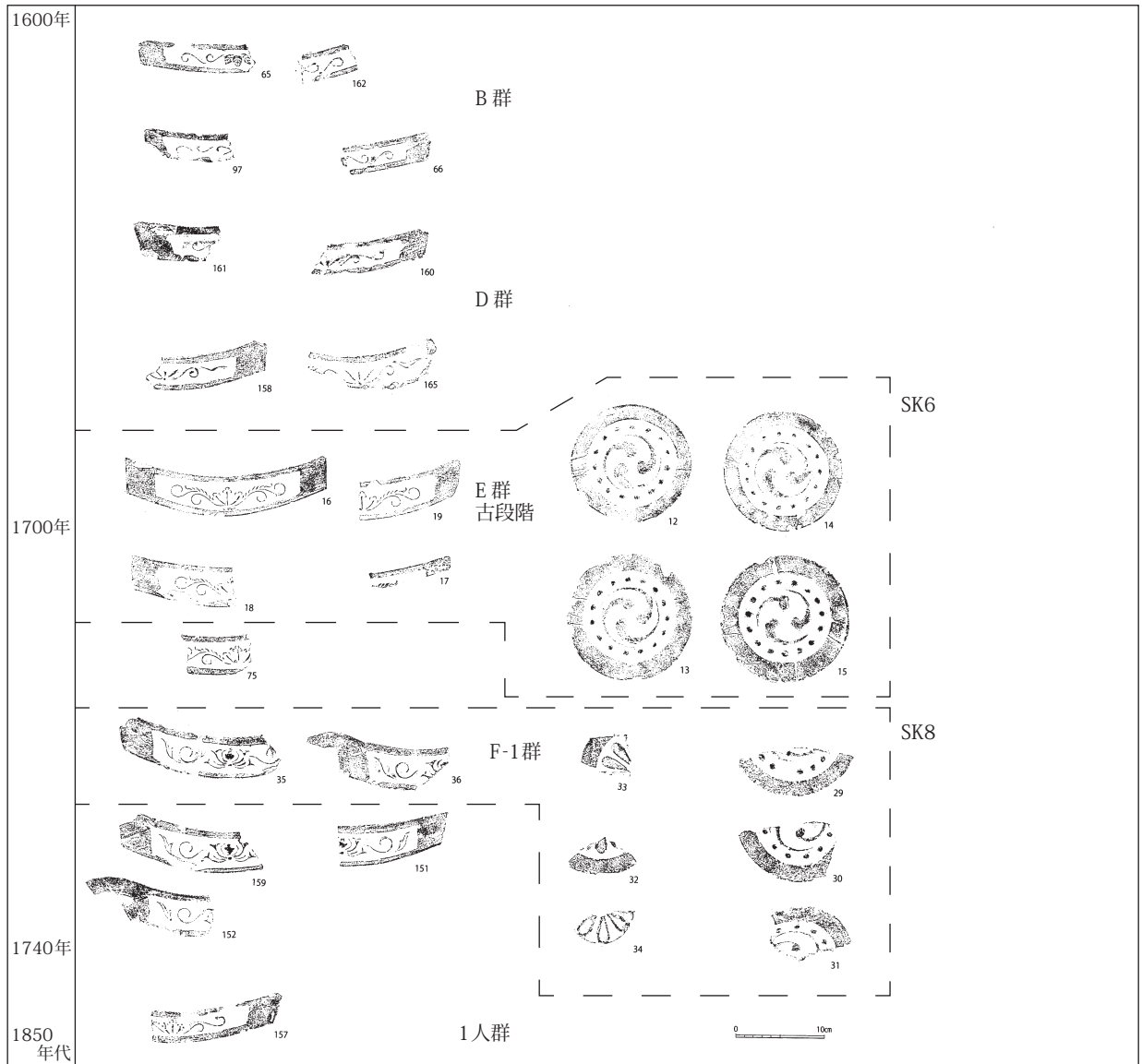
このように S K 6 と S K 8 は出土した軒平瓦と共伴した陶磁器・土器類との年代的な矛盾はなく極めて高い一括性を指摘でき、その廃棄時期が寛保三年（1743年）大火の事後処理の年代と一致するものといえる。

註1 吉田寛1993年『府内城三ノ丸遺跡』大分県教育委員会

註2 吉田寛2003「近世府内城・近世府内城下町跡出土瓦の編年的研究」（『山口大学考古論集』）



第 17 図 陶磁器・土器類編年図



第 18 図 軒平瓦編年図

出土遺物一覽 (陶磁器類)

挿図番号	遺物番号	地区名	遺構名	層位	器種		生産地	時期	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	残存度	備考
第8図	1	B2	包含層		磁器色絵	掛花入	肥前	18C後半～19C		21.6+ <i>a</i>	10.8+ <i>a</i>	型打ち後施釉 (柴付)	施釉 露胎 (型打ち)	1/2	底部に布目痕か
第9図	2	B2	S K 2		青磁	香炉	肥前	18C後半～19C中頃	(8.0)	3.1	3.6			2/3	底部に「原」の墨書
第9図	3	B2	S K 2		磁器	戸車	肥前	19C前半～中頃	径4.8	1.0				完形	
第9図	4	A1	S K 5		磁器染付	段重	肥前	19C前半～中頃	10.5	2.5	9.8			ほぼ完形	
第9図	5	A1	S K 5		陶器	瓶	関西系	19C		10.4+ <i>a</i>	4.7			口縁部付近欠失	
第9図	7	C1・2	S K 6		磁器染付	碗	肥前	18C	9.9	5.4	3.8	施釉 露胎	施釉	1/2	
第9図	8	C1・2	S K 6		白磁	小坏	肥前	1630～1650年代		3.15	2.3	施釉 露胎	施釉	口縁部付近欠失	
第9図	11	C1・2	S K 6		瓦質	火鉢			(16.0)	6.1+ <i>a</i>		工具によるナデ ヘラミガキ	工具によるナデ	口縁部付近1/4	
第10図	23	B2	S K 8		陶器	碗	京焼	18C前葉	9.2	6.4	5.6	施釉 露胎	施釉	3/4	
第10図	24	B2	S K 8	赤褐色 土層中	白磁	猪口	肥前	18C前	(9.1)	6.75	(6.1)	施釉 露胎	施釉	口縁部～底部破片	優品
第10図	25	B2	S K 8	赤褐色 土層中	陶器	鉢	京焼					施釉貫入 露胎	施釉貫入 露胎	口縁部～底部破片	珍品 被熱
第10図	26	B2	S K 8	赤褐色 土層中	土師器	皿 (灯明皿)			(10.7)	1.6	(5.4)	ヘラケズリ	ヨコナデ	1/5	珍品 煤付着
第10図	27	B2	S K 8	赤褐色 土層中	土師器	皿			(11.8)	2.0	(5.4)	ヘラケズリ	ヨコナデ	1/3	珍品 内面に黒斑
第10図	28	B2	S K 8	赤褐色 土層中	土師質	焙烙		18C前半	(31.0)	8.3+ <i>a</i>		ヨコナデ	ヨコナデ	1/3	
第11図	39	B2	S K 9		磁器染付	碗	肥前	18C後半	(9.3)	5.8	(3.6)			1/2	
第11図	40	B2	S K 9		磁器	広東碗	肥前	1780～1810年代	(9.4)	4.7+ <i>a</i>				2/3	
第11図	41	B2	S K 9		磁器染付	猪口	肥前	18C	(7.6)	6.1	(6.0)			口縁部～底部破片	
第11図	42	B2	S K 9		磁器染付	筒形碗	肥前	18C末～19C	(7.0)	4.5+ <i>a</i>				1/3	
第11図	43	B2	S K 9		白磁	猪口	肥前	18C前半	(7.6)	4.5	(3.0)			2/3	
第11図	44	B2	S K 9		磁器	碗	関西系	18C後半～19C	(6.8)	4.3+ <i>a</i>				底部欠失	
第11図	45	B2	S K 9		陶器	皿		19C	(9.0)	0.9+ <i>a</i>				口縁部	1/3
第11図	46	B2	S K 9		陶器	鉢	関西系	18C後半～19C	(16.6)	7.1+ <i>a</i>				口縁部～体部下端 1/6	珍品 内外面に貫入
第11図	47	B2	S K 9		瓦質	規炉		19C				丁寧なナデ	丁寧なナデ	口縁部破片	
第11図	48	B2	S K 9		瓦質	火鉢		19C				丁寧なヘラミガキ 後丁寧なナデ	丁寧なヨコ方向のヘラミ ガキ ヨコハケ	口縁部破片	
第11図	50	B2	S K 10		磁器染付	猪口	肥前	18C中～後半	1.9+ <i>a</i>	5.2				底部付近	五弁花文(手描き)
第11図	51	B2	S K 10		瓦質	箱火鉢		19C前半～中頃				ナデ ヨコナデ	ナデ	破片	
第11図	53	B2	S K 13		磁器染付	碗	肥前	18C	2.3+ <i>a</i>	4.0		施釉 露胎	施釉	底部	
第11図	54	B2	S K 13		磁器染付	灰落し	肥前	18C	6.2	9.0	5.0	施釉 露胎	施釉 露胎	3/4	
第11図	55	B2	S K 13		磁器染付	香炉	肥前	18C後半	(10.8)	8.0	7.8			口縁部一部欠失	
第11図	56	B2	S K 13		磁器染付	掛花入	肥前	18C後半～19C	5.7+ <i>a</i>	8.65+ <i>a</i>				破片	

挿図 番号	遺物 番号	地区名	遺構名	層位	器種		生産地	時期	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	残存度	備考	
第11図	57	B2	S K 13		白磁	猪口	肥前	18C前半	(9.6)	6.4	(4.2)	施釉 露胎	施釉	1/3	優品 口縁部に穿孔あり	
第11図	58	B2	S K 13		陶胎染付	碗	肥前	18C前半		3.7+ α	5.0			底部～体部下端		
第12図	59	B2	S K 13		土師器	皿	京都系	17C前半	(12.4)	2.1+ α		未調整 ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部の一部		
第12図	60	B2	S K 13		土師器	皿				1.6+ α	5.2	ヨコナデ 回転糸切り難し	ヨコナデ	口縁部の一部	糸切土師器	
第12図	61	B2	S K 13		土師器	灯明皿				2.1+ α	5.5	ヨコナデ	ヨコナデ	底部	糸切り土師器 スス付着部あり	
第12図	62	B2	S K 13		土師質	焙烙		18C前半				ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	口縁部		
第12図	63	B2	S K 13		陶器	播鉢		18C～19C				ナデ 貼付突帯	ヨコナデ 摺り目ヨコナデ滑ナデ 方向の摺り目9枚単位	破片	唐津系	
第12図	69	B2	S K 14		陶胎染付	碗	肥前	18C前半	(11.0)	7.0	(5.0)			1/3		
第12図	77	B2	S K 15		磁器染付	皿	肥前	18C中頃～後半		2.0+ α	8.1	施釉	施釉	底部		
第12図	78	B2	S K 15		陶器	鍋	関西系					施釉	施釉	破片	飯事道具 (ミナブ)	
第12図	79	B1	S K 16		土師器	皿		17C前半	(12.2)	1.5+ α		ヨコナデ 未調整	ヨコナデ	口縁部付近1/3	京都系土師器	
第13図	81	B1	S P 4		白磁	皿	中国 (景德鎮)	16C後半		1.4+ α	(6.0)	施釉 露胎	施釉	底部付近	1/4	
第13図	82	B1	S P 4		白磁	皿	中国 (景德鎮)	16C後半		2.0+ α	(9.6)	施釉 露胎	施釉	底部付近	1/4	
第13図	83	B2	S K 19		磁器染付	紅皿	肥前	18C後半～19C	(6.9)	3.0	(2.8)	施釉 露胎	施釉		1/2	
第13図	84	B2	S K 19		磁器染付	皿	肥前	18C後半～19C	6.8	3.5	2.8	施釉 露胎	施釉		3/4	
第13図	85	B2	S K 19		磁器染付	広東碗	肥前	1780～1810年代	(11.4)	6.2	(6.8)	施釉 露胎	施釉		1/6	
第13図	86	B2	S K 19		磁器染付	碗	肥前	18C後半	(10.2)	3.8	4.8	施釉 露胎	施釉	口縁部3/4欠	くらわんか碗	
第13図	87	B2	S K 19		陶器	碗	信楽系	18C後半～19C	(9.0)	5.0	(3.5)	施釉 露胎	施釉 貫入あり		1/3	
第13図	88	B2	S K 19		陶器	土瓶	関西系	19C	9.8	11.9	7.0			口縁部一部欠	関西系陶器	
第13図	94	B1	S K 21	1層	土師器	皿	京都系	16C末～17C (?)	(12.4)	2.2+ α		未調整 ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部破片	京都系土師器	
第13図	95	B1・2	S K 24		陶器	皿	瀬戸美濃	1590～1600年代	(10.2)	1.7	5.4				1/3	大窯Ⅳ期
第13図	96	B1・2	S K 24		陶器	鉢	唐津	1590～1610年代		4.2+ α	(7.2)			口縁部～底部 1/3	肥前陶器 (唐津焼) 絵唐津	
第13図	98	C2	S K 25		磁器	碗	肥前	18C前半	(9.4)	4.6	(4.0)				1/3	肥前磁器
第13図	99	C2	S K 25		陶胎染付	碗	肥前	18C前半	(11.4)	7.4	5.2				2/3	肥前 陶胎染付
第13図	100	C2	S K 25		磁器染付	皿	肥前	18C前半	(22.4)	3.0	(14.0)				1/4	肥前磁器
第13図	101	C2	S K 25		瓦質	香炉			(11.6)	5.9	(7.0)	ナデ 丁寧なナデ	ヨコナデ ナデ		1/3	瓦質土器
第14図	106	A1・2	包含層		磁器	小坏	中国	18C後半～19C	(8.2)	4.3	3.6	施釉 露胎	施釉		1/2	清朝磁器
第14図	107	A1・2	包含層		磁器	猪口	肥前	18C	(8.2)	6.6	(6.0)	施釉 露胎	施釉		1/3	被熱
第14図	108	A1・2	包含層		磁器	蓋	肥前	18C前半	8.2	2.3+ α					3/4	蓋物の蓋 被熱
第14図	109	A1・2	包含層		白磁	小皿	肥前	17C中～後半 (?)	(7.4)	1.6	(4.0)				1/2	

挿図 番号	遺物 番号	地区名	遺構名	層位	器種		生産地	時期	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	残存度	備考
第14図	110	A2	包含層		陶器	器種不明 (花入れ?)	福岡産?	18C		13.3+ α	(11.8)			1/2	
第14図	111	A1・2	包含層		陶器	不明	関西系	18C		6.7+ α	(5.6)	施釉 露胎	施釉	体部下半~底部 1/4	
第14図	112	A1・2	包含層		陶器	鉢	京都	18C後半~19C				施釉	施釉	1/6	京焼 貫入あり 被熱
第14図	113	A1	包含層		土師器	皿	京都	17C前半	(10.4)	2.4		ヨコナデ 未調整	ナデ ヨコナデ	2/3	京都系土師器
第14図	114	A1	包含層		陶器	唾壺	関西系	18C後半~19C	6.6	6.0	3.2			3/4	
第14図	115	A1・2	包含層		陶器	ミチナフ掃鉢		18~19C?	(8.8)	3.85	(4.7)	ヨコナデ	ヨコナデ 掃り目 (6本/単位)	1/3	飯事道具 (ミチナフ)
第14図	116	B2	包含層		磁器	色絵碗	肥前	18C	9.3	5.6	3.6	施釉 露胎	施釉	1/2	
第14図	117	B2	包含層		青磁	染付碗	肥前	18C後半	11.0	6.9	3.8	施釉 露胎	施釉	2/3	被熱
第14図	118	B2	包含層		白磁	猪口	肥前	18C前半	4.4	3.3	3.0			2/3	
第14図	119	B2	包含層		白磁	紅皿	肥前	18C前半	4.6	1.3	1.6			完形	
第14図	120	B2	包含層		白磁	飯事道具 (ミチナフ)	肥前	18C後半~19C	2.4	1.1	0.9			完形	
第14図	121	B2	包含層		陶器	碗	肥前	18C前半	(9.4)	6.5	4.8			1/3	肥前陶器 京焼風
第14図	122	B1	包含層		陶器	碗	肥前	17後半~18前半	(8.4)	5.0	4.9	施釉 露胎	施釉	口縁部一部、底部	肥前陶器 京焼風
第14図	123	B2	包含層		陶器	碗	信楽系	19C	8.7	3.1	5.3	施釉 露胎	施釉	口縁部一部、底部	
第14図	124		包含層		陶器	碗	信楽系	18C後半~19C	8.8	4.7	3.4	施釉 露胎	施釉	1/2	小杉碗
第15図	125	B2	包含層		陶器	碗		18C前半	11.2	8.3	4.8				内外刷目文様
第15図	126		包含層		陶器	碗	信楽系	18C後半~19C	9.2	5.25	3.4	施釉 露胎	施釉 貫入あり	1/3	信楽系 陶器
第15図	127	B1	包含層		土師器	皿		17C前半	9.2	1.5		ヨコナデ 指圧痕 未調整	ヨコナデ 指圧痕	3/4	京都系土師器
第15図	128	B2	包含層		土師器	皿			(14.0)	2.3		回転ヘラケズリ ヨコナデ	ヨコナデ	1/4	良品 搬入品 内面スス付着 稀少
第15図	129	B2	包含層		土師器	焼塩壺		17C前後	(4.8)	6.4+ α		ナデ ヨコナデ	シボリ痕 ヨコナデ	1/4	
第15図	130	B2	包含層		土師器	焙烙		18C前葉	(30.0)	6.5+ α		ヨコナデ	ヨコナデ	破片	
第15図	132	B1	包含層		土師器	内黒埴		9~10C?	(13.0)	5.3	(6.2)	回転ヘラケズリ ヨコナデ	ヘラミガキ	1/3	
第15図	133	C2	包含層		磁器	染付蓋	肥前	1780~1810年代	10.4	3.0	5.3	施釉	施釉	3/4	広東碗蓋
第15図	134	C2	包含層		青磁	染付筒形碗	肥前		(7.8)	6.5	4.2	施釉 露胎	施釉	1/2	外底部に「筒江」銘
第15図	135	C2	包含層		白磁	紅皿	肥前	18C後半~19C	4.8	1.3	1.4	施釉 露胎	施釉	ほぼ完形	
第15図	136	C2	包含層		磁器	染付小坏	肥前	17C末~18前半	7.1	2.8	4.6	施釉 露胎	施釉	1/2	
第15図	137	C2	包含層		陶器	碗	肥前	17C後半~18前半	(9.2)	6.8	(3.5)	施釉 露胎	施釉	1/2	肥前京焼風陶器
第15図	138	C2	包含層		陶器	碗	信楽系	19C前半~中頃	9.1	4.9	3.2	施釉	施釉	3/4	貫入
第15図	139	C2	包含層		陶器	鉢	関西系					施釉 露胎	施釉	口縁部~底部破片	関西系(京焼)陶器
第15図	140	C1・2	攪乱		陶器	皿		19C						破片	

挿図 番号	遺物 番号	地区名	遺構名	層位	器種		生産地	時期	口径 (残存幅)	器高 (残存高)	底部径 (胴部最大径)	外面の文様・調整	内面の文様・調整	残存度	備考
第15図	141	C1	攪乱		土師器	皿		17C前半	(12.6)	2.1+ α		ヨコナデ 未調整	ヨコナデ	1/4	京都系土師器
第15図	142	C1	攪乱		土師器	皿		17C前半				ヨコナデ 未調整	ヨコナデ	口縁部破片	京都系土師器
第15図	143	C1	攪乱		土師器	皿		17C前半				ヨコナデ 未調整	ヨコナデ	口縁部破片	京都系土師器
第15図	144		一括		磁器	染付紅皿	肥前	18C後半～19C	5.9	2.5	2.9	施釉 露胎	施釉	2/3	
第15図	145		一括		青磁	染付蓋	肥前	18C末～19C	8.3	2.9	3.6	施釉 露胎	施釉	3/4	
第15図	146		一括		磁器色絵	瓶	肥前	18C後半～19C		7.0	3.4	施釉 露胎	施釉 露胎	上部欠失	
第15図	147		一括		磁器	器種不明	肥前	18C後半～19C	4.8	7.2	5.6	施釉 露胎	施釉 露胎	ほぼ完形	

出土遺物一覧（瓦類）

挿図番号	遺物番号	地区名	遺構名	層位	器種		時期	大きさ			文様	残存度	備考
								長さ(径)	幅	厚さ			
第9図	12	C1・2	S K 6		瓦	軒丸瓦		13.6		1.7	巴文	瓦当	巴左回り、珠文15
第9図	13	C1・2	S K 6		瓦	軒丸瓦		14.6		1.6	巴文	瓦当	巴左回り、珠文15
第9図	14	C1・2	S K 6		瓦	軒丸瓦		13.8		1.6	巴文	瓦当	巴左回り、珠文15
第9図	15	C1・2	S K 6		瓦	軒丸瓦		14.5		1.8	巴文	瓦当	巴左回り、珠文15
第10図	21	B 2	S K 7		瓦	軒丸瓦		13		1.6	巴文	瓦当面1/2	巴左回り
第10図	22	B 2	S K 7		瓦	軒丸瓦		(14.2)		1.6	巴文	瓦当面1/6	巴左回り
第10図	29	B 2	S K 8		瓦	軒丸瓦					巴文	1/3	
第10図	30	B 2	S K 8		瓦	軒丸瓦					巴文	1/4	
第10図	31	B 2	S K 8		瓦	軒丸瓦					巴文	破片	
第10図	32	B 2	S K 8		瓦	軒丸瓦					小菊文	破片	
第10図	33	B 2	S K 8		瓦	軒丸瓦					小菊文	破片	
第10図	34	B 2	S K 8		瓦	軒丸瓦					小菊文	破片	
第12図	64	B 2	S K 13		瓦	軒丸瓦		14.5		1.8	巴文	瓦当面	巴左回り、珠文15
第12図	70	B 2	S K 14		瓦	軒丸瓦		13.5		0.8	巴文	瓦当周縁1/4欠	巴左回り、珠文15
第12図	71	B 2	S K 14		瓦	軒丸瓦		-	3.5	1.5	巴文	瓦当周縁1/3欠	
第12図	72	B 2	S K 14		瓦	軒丸瓦		13		1.9	巴文	瓦当	巴左回り、珠文12
第13図	93	B 2	S K 19		瓦	軒丸瓦		14+ α	-		巴文	瓦当	
第14図	103	C 2	S K 25		瓦	軒丸瓦		-	-	1.5	巴文	周縁部2/3欠	巴左回り、珠文15
第14図	104	C 2	S K 25		瓦	軒丸瓦					巴文	1/2	
第14図	105	C 2	S K 25		瓦	軒丸瓦		-	3.1	1.5	巴文	瓦当面1/2	
第16図	153	B1	包含層		瓦	軒丸瓦		14.2		1.7	巴文	瓦当面	巴左回り、珠文15
第16図	154	B2	包含層		瓦	軒丸瓦		17.8		2.2	巴文	瓦当面2/3	巴左回り

挿図番号	遺物番号	地区名	遺構名	層位	器種		時期	大きさ			文様	残存度	備考
								長さ(径)	幅	厚さ			
第16図	155	B2	攪乱		瓦	軒丸瓦						瓦当面破片	
第16図	156	B3	攪乱		瓦	軒丸瓦					巴文	瓦当面1/2	巴左回り
第16図	164	C2	包含層		瓦	軒丸瓦		14.6		1.8	巴文	瓦当面	巴左回り、珠文15
第9図	16	C1・2	SK6		瓦	軒平瓦		22.6	4.3	1.5	均整唐草文	瓦当破片	
第9図	17	C1・2	SK6		瓦	軒平瓦		-	-	-	均整唐草文	瓦当	
第9図	18	C1・2	SK6		瓦	軒平瓦		-	4.3	1.6	均整唐草文	瓦当破片	
第9図	19	C1・2	SK6		瓦	軒平瓦		-	4.0	1.5	均整唐草文	瓦当面1/2	
第12図	65	B2	SK13		瓦	軒平瓦	17c前半	-	3.1	1.4	均整唐草文	瓦当面1/2	
第12図	66	B2	SK13		瓦	軒平瓦	17c前半	-	3.0	1.4	均整唐草文	瓦当面1/2	
第12図	73	B2	SK14		瓦	軒平瓦		-	3.6	1.7	唐草文	瓦当一部	
第12図	74	B2	SK14		瓦	軒平瓦		-	3.5	1.6	唐草文	瓦当一部	
第12図	75	B2	SK14		瓦	軒平瓦		-	4.2	1.6	均整唐草文	瓦当中心飾	
第12図	76	B2	SK14		瓦	軒平瓦		-	3.5	1.5		瓦当一部	
第13図	97	B1・2	SK24		瓦	軒平瓦		-	3.0	1.5	唐草文	瓦当面1/2	新出の軒平瓦
第16図	151	A1・2	包含層		瓦	軒平瓦		-	4.5	1.9	均整唐草文	瓦当面1/2	
第16図	157	B2	包含層		瓦	軒平瓦	18世紀	-	3.3	1.2	均整唐草文	瓦当面1/2	
第16図	158	B2	包含層		瓦	軒平瓦		-	3.5	1.6	均整唐草文	瓦当面1/2	
第16図	159	B1	包含層		瓦	軒平瓦	18世紀	-	4.5	1.8	均整唐草文	瓦当面1/2	
第16図	160	B1	包含層		瓦	軒平瓦	18世紀前半	-	3.3	1.4	均整唐草文	瓦当面1/2	
第16図	161	B1	攪乱		瓦	軒平瓦						瓦当面破片	
第16図	162	B1	包含層		瓦	軒平瓦	17世紀	-	3.0	1.6	唐草文	瓦当面破片	
第16図	165	C1	包含層		瓦	軒平瓦	17世紀				均整唐草文	瓦当面2/3	
第11図	37	B2	SK9		瓦	鬼瓦						鬼瓦破片	
第11図	38	B2	SK9		瓦	鬼瓦						鬼瓦破片	
第12図	67	B2	SK13		瓦	鬼瓦						鬼瓦破片	
第16図	163	B2	包含層		瓦	鬼瓦						鬼瓦破片	
第10図	35	B2	SK8		瓦	軒平瓦		-	4.5	1.7	均整唐草文	瓦当面3/4	
第10図	36	B2	SK8		瓦	棧瓦		-	4.5	1.6	均整唐草文	瓦当面1/2	
第16図	152	A2	包含層		瓦	棧瓦		-	4.7	1.6	均整唐草文	瓦当面破片	
第9図	6	A1	SK5		瓦	平瓦		-	-	1.7		端面付近の破片	「細安」の刻印
第10図	20	C1・2	SK6		瓦	平瓦		28+a	21.5+a	2		2/3	

出土遺物一覧（土製品）

挿図番号	遺物番号	地区名	遺構名	器種		大きさ			調整	残存度	備考
						長さ	幅	厚さ			
第13図	89	B 2	S K 19	土製品	土人形	(4.7)	(4.4)	0.4	ユビオサエ、ナデ	破片	
第9図	9	C 1・2	S K 6	土製品	土錘	4.7	2.0			完形	孔径1.0、重さ18.5g
第11図	52	B 2	S K 10	土製品	壁土					一部	
第15図	131	B2	包含層	土製品	人形				ユビオサエ	頭部欠失、1/2	

出土遺物一覧（石製品）

挿図番号	遺物番号	地区名	遺構名	大きさ			器種		残存度	備考
				長さ(径)	幅	厚さ				
第12図	68	B 2	S K 13	9.6 + a	5.8	1.1	石製品	砥石	一部欠失	
第13図	91	B 2	S K 19	—	6.0	2	石製品	砥石	1/3	
第13図	90	B 2	S K 19	3.5	3.5	1	石製品	玉砂利	完形	
第13図	92	B 2	S K 19	2.8	2.4		石製品	火打ち石	一部欠失	重さ11.5g
第15図	149	C 2	包含層				石製品	硯	破片	赤間石
第15図	150	B 1	包含層	—	—	1.2	石製品	硯	破片	赤間石
第13図	80	B 1	S K 16	32	34	22	石造物	五輪塔地輪	一部欠失	

出土遺物一覧（金属製品）

挿図番号	遺物番号	地区名	新遺構名	器種		大きさ			残存度	備考
						長さ(径)	幅	厚さ		
第9図	10	C 1・2	S K 6	銭貨	寛永通宝	2.3			完形	重さ4.1g
第15図	148	C 1	攪乱	金属製品	小柄	9.1	1.3	0.4	柄部	
第11図	49	B 2	S K 9	金属製品	煙管吸口	(5.7)	0.8	0.7	吸口付近	
第13図	102	C 2	S K 25	金属製品	銅製品	(2.2)	(2.1)	0.1	破片	

第4章 自然科学分析

第1節 分析1

株式会社パレオ・ラボ 中村賢太郎

1. はじめに

大分県大分市に位置する府内城・城下町遺跡（府内城三ノ丸遺跡）の発掘調査で出土した動物遺体について報告する。

2. 試料と方法

試料は、動物遺体2点である。試料1はA1区SK5から出土した獣骨、試料3はB2区のSK19から出土した貝殻である。時期は、出土した陶磁器から18世紀後半～19世紀半ばと考えられている。

同定は肉眼で現生標本との比較により行った。計測はノギスを用いて行った。

3. 結果と考察

試料1はウシの右肩甲骨と同定された。肩甲骨の計測値は、全長（HS）が290mm以上、関節最大幅（GLP）が63.6mm。欠損のため全長（HS）は完全ではないものの290mm以上であるため、ウシの体高は110cm以上と推定される。また、肩甲頸尾方の縁辺には、幅2～3mm、長さ2～5mmの溝状の傷が十数条の列をなしていた。溝状の傷は、風化しており形態が不明瞭であるが、ネズミなど齧歯類の噛み痕の可能性が考えられる。齧歯類の噛み痕だとすると、肩甲骨が一定期間地表に曝されていた可能性が考えられる。

試料2はメガイアワビの貝殻と同定された。殻の色はあわい橙色である。殻は、上面から見ると丸みがあり、側面から見るとやや膨らむ。螺肋が明瞭である。穴列に並行する溝は見られない。殻長130mm。メガイアワビは、房総半島から九州にかけて分布する。おそらく府内城・城下町遺跡近隣の海で採取されたと考えられる。

Tab.1 出土動物遺体

試料番号	調査区	遺構	遺物番号	種別	分類群	部位	左右	部分・状態	計測値	備考
試料1	A1区	S-5	No.1	獣骨	ウシ	肩甲骨	右	関節ほか2/3遺存	GLP:63.6mm、HS: ≥290mm	肩甲頸尾方の縁辺にげっ歯類の噛み痕？
試料3	B2区	S-33			メガイアワビ	貝殻	—	ほぼ完存	殻長:130mm	

参考文献

Driesch, Angela Von Den (1976) A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites.

Peabody Museum Bulletins 1, p137, Peabody Museum Press.

松井章 (2008) 動物考古学. p312, 京都大学学術出版会.



PL.1 府内城三ノ丸遺跡から出土した動物遺体

1. ウシ右肩甲骨（試料1） 2. メガイアワビ貝殻（試料3）

1. はじめに

日本の国土は火山灰性の酸性土壌に広く覆われ、動物遺存体の保存状態には恵まれないのが一般的である。そのため動物遺存体が出土するのは貝塚、石灰岩地帯の洞穴や岩陰などが代表的で、近年では湿地環境の遺跡や遺構からも多くの動物遺存体が報告されている。

ここでは、大分市大手町の府内城・城下町（府内城三ノ丸遺跡）より出土した動物骨の同定を行った結果について報告する。

2. 試料

試料は、S K 5から出土した動物骨（試料2）である（写真1・2）。

3. 分析方法

試料は、保存状態がよく、肉眼で観察し、形態的特徴を現生骨格標本との比較によって同定した。

4. 所見

ウサギ類の頭蓋骨（上顎骨・左）が1点、下顎骨（左1右1）が2点同定された。野生のノウサギか、家畜のイエウサギかの区別はできない。いずれにしても、臼歯が生え揃った（萌出が完了）成獣である。



PL.2 府内城三ノ丸遺跡から出土した動物遺体

第5章 総括

今回の調査は、木村家屋敷の西端部分が対象であった。この位置は北と西の街路が交差する角地にあたり、本丸とは堀を隔てた直近の中核地域、侍町であった。

木村家は延宝四年（1676）に調査区付近に屋敷替えとなり、明治初年まで存続したとされている。当該地は明治以降から現在までの約150年間大分の近代化と軌を一にしながら学校・官庁建設など伴い繰り返し造成が行われた結果、江戸時代の生活面がほとんど残存しない状態となった。

これまでの第1次・2次調査では、検出した土坑の年代を埋土中から陶磁器・土器類の製作年代を基本として0期～Ⅵ期の7期8小期が設定されている（註1）。江戸時代では土坑40基について時期区分が行われ、Ⅰ期の16世紀末から17世紀初頭、Ⅱ期の17世紀前半から後半、Ⅲ期の17世紀末から18世紀中頃、Ⅳ期の18世紀後半、Ⅴa期の18世紀末～19世紀前半、Ⅴb期の19世紀前半から中頃、Ⅵ期の19世紀後半以降の継続的な流れが把握された。

特にⅢ期の火災処理土坑（SK14・15）では高熱による変形や融着した多量の出土遺物の年代観から寛保三年（1743）の「寛保の大火」に関連づけられるとする見解が示され注目された。さらに、出土した近世瓦の分類と編年は陶磁器類と瓦が良好な状態で共伴した土坑11基の資料をもとに基本的な編年体系が作成され、現在の基礎資料となっている（註2）。

今回検出した遺構は土坑24基、ピット9基であるが、遺構相互の関係性や明確な建物痕跡を示す例はなかったといえる。しかし、2基の火災処理土坑は出土した瓦類、陶磁器・土器類の年代が寛保三年（1743）以前という点で一致しており、従前の見解の追加資料として重要である。

出土遺物については、17世紀初頭～19世紀中頃までの陶磁器・土器類が遺構や包含層あるいは近世以降の攪乱層の中から出土し、江戸時代全期にわたる継続な生活を示していた。瓦類については、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦を確認している。このうち火災処理土坑（SK6・8）から出土した軒平瓦について再度確認すると、SK8出土のF-1群を1743年以前に位置づけられる可能性があり、従来の年代観18世紀中頃をさらに遡ることを示した。共伴した巴文の軒丸瓦についてはセットの可能性もある。SK6出土の軒平瓦E群古段階は従来の年代観17世紀末～18世紀前半を追認するものといえる。軒丸瓦の巴文・小菊文の2種類の瓦当文様は軒平瓦E群とのセット関係を検討する上で有効資料である。現在、軒丸瓦の編年作業は巴の文様・珠文に類似性が高く分類が難しい状況にあり、十分には整備されていない状況といえよう。今後、良好なセット関係の事例増加などで編年の整備が期待される。また、幕末の廃棄土坑から出土した牛やウサギの骨やメガイアワビの貝殻は当時の食生活等を示す資料として注意したい。

註1 吉田寛1993年『府内城三ノ丸遺跡』大分県教育委員会

註2 吉田寛2003「近世府内城・近世府内城下町跡出土瓦の編年的研究」（『山口大学考古論集』）

写真図版

遺物写真の番号は、出土遺物実測図の番号と共通



遺跡全景（東上方面から）



遺構検出状況（南方向から）



土層 1 〈南側〉（東方向から）



土層 1 〈中央南寄〉（東方向から）



土層 1 〈中央〉（東方向から）



土層 1 〈中央北寄〉（東方向から）



土層 1 〈北側〉(東方向から)



土層 2 (南方向から)



土層 3 (西方向から)



SK2 (南方向から)



SK1 (南方向から)



SK3 (南方向から)



SK4 (南方向から)



SK8 (南方向から)



SK5 (南方向から)



SK6 ① (北方向から)



SK6 ② (東方向から)



SK6 ③ (北方向から)



SK6 ④ (北方向から)



SK6 完掘状態 (北方向から)



SK13 (南方向から)



SK14 (南方向から)



SK16 (東方向から)



SK19 遺物出土状態 (南方向から)



SK24 (西方向から)



SK19 完掘状態 (南方向から)

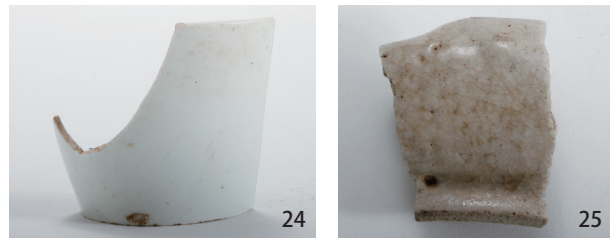


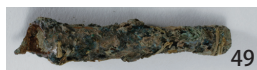
遺跡完掘状態〈西半部〉(南方向から)



遺跡完掘状態〈東半部〉(南方向から)









52



53



56



54



55



57



58



59



61



60



62



63



64



67



65



68



69



66





94



95



96



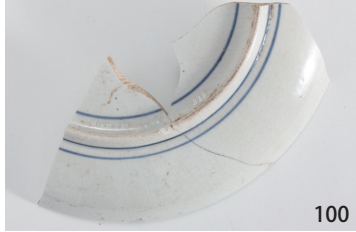
98



99



110



100



101



102



103



104



105



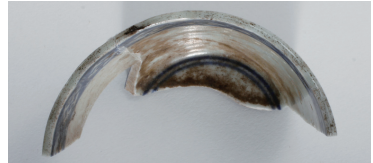
111



112



106



107

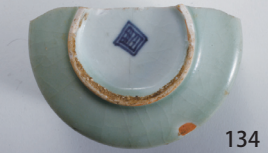


108



109







137



138



139



140



141



142



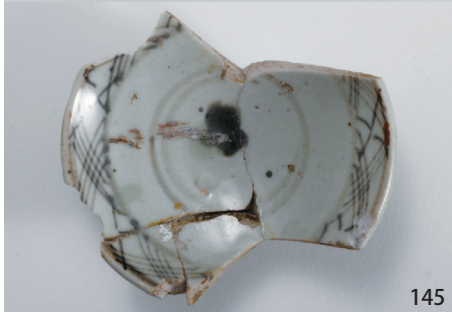
143



144



146



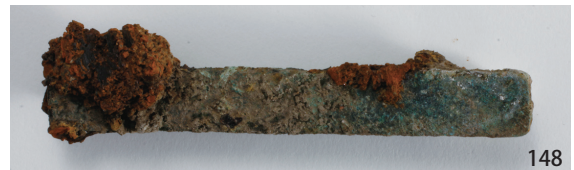
145



147



149



148



150



151



152



報告書抄録

ふりがな	ふないじょうさんのまるいせきさん
書名	府内城三ノ丸遺跡Ⅲ
副書名	大分県庁新館受変電棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第90集
編集・執筆者	小林昭彦
所在地	870-1113 大分県大分市 大字中判田1977番地
発行年月日	平成28年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	しょざいち 所在地	コード		北緯 °'〃	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふないじょう じょうかまち 府内城・城下町	おおいたけんおおいたし おおて まちさんちようめ 大分県大分市大手町3丁目	201	041	33° 14' 20"	131° 36' 55"	2015.01.13 ～ 2015.02.24	265.7㎡	県庁施設 建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
府内城・城下町	城下町	近世	土坑	陶磁器・土器類、瓦類ほか	調査区は江戸時代の三ノ丸・武家屋敷跡（木村家）
要約	平成3年度の第1・2次調査と同様に江戸時代府内藩の上級武士・木村家の屋敷を調査したものの。今回は屋敷西端部付近が調査対象となった。寛保三年（1743）の大火に伴う火災処理土坑と多量の陶磁器類や瓦類などを検出した。特に出土した軒平瓦については、これまでの調査所見の補強と新たな知見を得ることができた。				

府内城三ノ丸遺跡Ⅲ

—大分県庁新館受変電棟新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—
大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第90集

2016年（平成28）年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田1977番地
電話 097-597-5675

印刷 株式会社大分出版印刷
〒870-0841 大分市六坊北町4485番地の1
電話 097-546-0200
